
【小説投稿企画】不思議の国のお祭り事情

【小説投稿企画】不思議の国のお祭り事情

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【小説投稿企画】不思議の国のお祭り事情

【Zコード】

Z8175K

【作者名】

【小説投稿企画】不思議の国のお祭り事情

【あらすじ】

千人単位で異世界トリッパーが在住し、平穏な暮らしを築いている世界。けれど『最強系逆ハーレム少女』が遣つてくると言う不穏な未来が予見され、そんな日常にも影が指す。これを憂えたトリッパー一同はそんな未来を回避すべく、国家を一つ巻き込んで『心の伴わない演技による、逆ハーレム状態の形成』を企てた。けれど、それは名づけられた名称の所為で、次第にお祭り騒ぎに発展し…？異世界の『祭典』に、関わったり妨害したり見守つたり参戦して、泣いたり笑つたりする人々を、複数の参加者が様々な視点から描く

短編小説投稿企画に寄せられた作品をまとめました。【企画サイト】

<http://matuirikaku.web.fc2.co>

m /

Pronto page 不思議の国のお祭り事情は、Iの上も無く残酷でした

未来視たちが一斉に、その未来を予見したのは、とあるつららかな春日の午後だった。

少年はその未来を認識した途端、あまりの事態にさあつと顔を青ざめさせた。

女は「これ何の黒歴史よ！？」と、くつろいでいたカフェで咄嗟に叫んでしまい、畠仕事に精を出していた老人は、見てしまったその信じがたい未来に思わず硬直した。

大陸中の未来視がそれを見たのだ。彼らの総本山であるリーゼンフォード一族の本家に、その日のうちに連絡が行つたのは当然の事である。

翌日には未来視たちの予見した未来は、報告を受けたリーゼンフォード家人間によつて書類に纏められた。そして即座に一族の長老達の間で審議にかけられる。

けれど一族と同類らしき少女が大きく関わっているだらうその未来は、小さくはあつたが一国をも巻き込んでいるように見受けられた。下手をすれば国際問題に発展しかねないこの件は大いに彼らを悩ませ、また消耗させた。

同時に予見されたその突飛な未来の噂は、人伝に大陸中を駆け巡る。

友人から聞いた話を、宿屋の主人が旅人に伝え。

母が零していた愚痴を、子供が文通相手に面白おかしく書いて送る。

小耳に挟んだ噂話を、調べた記者は記事にまでして、こいつして情報は驚くべき速さで世界に伝達された。

何しろ、予見された未来は奇抜でありえなさ過ぎたのだ。そして、

実現したら本気で嫌だと思える内容だった。

「冗談交じりに語られる事もあれば、真剣な話題として取り上げられる事もあり。

リーゼンフォード一族がこの予見された未来について、各國の重鎮を正式に招いて話し合つ場を設ける事を決めた頃。その噂について知らない者は、殆ど居ないほどであった。

さて、そう言う訳で興味津々の国民達が見守る中、会談はディリトリシアの王都で開かれる事となつた。

最大の当事者であるリーゼンフォード一族の、本家が籍を置くのがこの国であつたと言うものもある。しかし最大の理由は、噂を聞いた王国の重鎮が、真っ先に名乗り出たと言う事だ。

「そんな面白い事を話し合つのであれば、是非我が国にて行つてもらえないか」と。

一概にただ面白いだけとは言えないだらうとの未来。それに、リーゼンフォード一族の次に密接に関わつてくるのは、ディリトリシア王国であると曰われている。だと言つのに満面の笑みで、金髪の使者はそう言ったのだ。

「それではまず、問題とされている『リーゼンフォード一族の未来視が予見した未来』について説明させていただきます」

さて、そして開かれた会談の当日。早々に黒髪の司会者が発言すると、少しばかりざわついていた会談の場は水を打つたように静まり返つた。

未来視が一斉に予見をした日から、既に一月が経過している。

『『どんでもない未来の噂』を、今集まっている人々も一度は耳にしていた。

「問題の未来が予知されたのは先月、四月二十一日の午後三時頃です。予見した未来視はリーゼンフォード一族に属する来訪者の内、未来予知能力を持つ全ての人間であると確認が取れました。詳しくは、お手元の資料をご覧下さい」

紙の擦れる音があちらこちらで響いた。

この世界には、『ごく当たり前のように異世界からやつてきた渡来してきた人々が存在し、受け入れられ、暮らしている。

この未来視を初めとした、様々な異能を持っているのも彼らだけだ。

そんな来訪者と呼ばれる、異世界からやつてきた もしくはやつてこさせられた人々の殆どが属しているのが、リーゼンフォード一族である。大抵の来訪者は、最初は保護される形でこの一族に参入してきている。そしてこの世界に馴染むにつれて、彼らは今度は新たにやつてくる同類を保護していく側になるのだ。

リーゼンフォード一族とは古くから、時に様々な役立つ知識や技術や異能をもつとして、世界に利益をもたらす異世界からの来訪者の代名詞に等しい。

様々な理由で、各国で重宝されている隣人が予見した未来だ。彼らがこの世界に由来する出自ではないからと言つて、無碍にしたりする事などできなかつた。

殆どの参加者が真剣に資料に目を通しているのを確認すると、司会者の青年は黒色の瞳を一度瞬かせてから言葉を続けた。

「さて、問題の未来の内容についてですが、寄せられた報告を簡潔にまとめますと、次のようになります。『所謂空想上典型的来訪者のように見受けられる少女が、リーゼンフォード一族当代当主、デイリトリシア王国第一王子殿下を始めとした、複数の男性を周囲に侍させていた。彼女は実際には良吏である幾人かの実在する官吏と思しき人々を奸臣、佞臣として、聖女である己は神からの宣旨を聞いたなどとの発言をしながら失脚を指示していた。また、魔物と思しき生物に対して強烈な光を浴びせ、一瞬にして消し去るなどの異能を得ているようにも見受けられた』、以上です。正確な証言は会談の通知の折に送付いたしました資料に記されていますので、後ほどご確認ください』

来訪者の多くは、あまりに強大すぎる異能を持っているわけではない。仮に持つていたとしても、強すぎる力は害になりやすいのだ。

世界に害いなされる事を畏れた、世界の意思と呼ばれる神に等しい存在によって、この世界では使えなくなつてゐる事が多いとされている。

だからこそ、だらうか。まとめられた説明の内容に、多くの参加者が驚いたようなそぶりを見せた。

示された予見の内容は、現実にはありえないだらう、と言うか正直ありえて欲しく無い内容だった。

予見された『複数の男性を侍らせ、己を聖女だと発言する少女』が、空想上典型的来訪者と呼ばれている事からしてそうである。

空想上典型的来訪者とは、『世界の順調な発展を著しく阻害するほどに、大きな力を持つた来訪者』であつたり、『国家の上層部に関われば、一国の政治を崩壊させかねないほどに異常に他人に好かれやすい来訪者』などと言つた、現実には決して存在しない、空想小説などでよく見られる種類の来訪者を指して言う。

だからこそ、そんな未来が予知された事に人々は有りえない、馬鹿馬鹿しいと笑い、同時に外れる事の無い予見に本気で未来を危惧したのだ。

空想上典型的来訪者と呼ばれる類の人物は、創作上でこそ好ましく感じるだらう。

けれど実際に存在すれば、望むと望まないとに関わらず、彼もしくは彼女の周囲の人間関係や生活は脆く崩れるだらう。大きすぎる力や効果とは、得てしてそう言つものである。

加えて、問題の未来では空想上典型的来訪者と思しき少女は、権力者の側に居たとされている。

国家の上層部の人間の大半が一人の人間に傾倒したり、国民がただ一人に頼りきつてしまふなど。

そんな事態、下手をすれば国すら傾きかねないではないか。

一国であつても国が傾けば、その余波は大きい。そう言つて訳で未來の実現は、渦中のリーゼンフォード一族、王子が関わっているらしいティリトリシア王国のみならず、近隣諸国にとつても望ましい

事ではなかつた。心情的な問題だけではなく、政治的経済的な観点から見ても、だ。

「……確認しますが、リーゼンフォード殿。」の未来は、回避する事は不可能なのでですか？」

資料を見つめていた、ルティア公国からの代表者が聞いてきた。来訪者は多少の例外はあるものの、皆がリーゼンフォード姓だ。この場には来訪者である人間も多く参加していたので、少しばかり誰が答えたものかと言う戸惑いの空気が流れた。

しかし一族の当主であるクラウディオ・リーゼンフォード発言したため、それもすぐに霧散する。

二十代のはじめと見受けられる彼は、しかし纏う霧囲氣こそ老獪なものであった。視線だけで空気を收め、おもむろに口を開く。

「不可能ですな。凡そ百名の予見者が、場面は違えど共通した未来を見たとなれば……どう転んでも、これは確實に現実となる未来でしょう」

「回避は不可能、と？」

「いいえ、ある意味では可能かと」

大きく場がざわめいた。

クラウディオは軽く微笑して「お手元の資料の、第十一頁」と覧下さり、「と、よく通る声で言った。

またあちらこちらから紙をめくる音が聞こえてくる。けれど今度はそれもすぐに止み、代わって一度は止んだざわめきがまた大きくなつた。

訝しげに眉をひそめる者も居れば、興味深げに資料を読み込んでいく者も居る。

クラウディオは軽く彼らに視線を遣つて、再び口を開いた。

「これは我が一族の一員である、カナデ・リーゼンフォードと言う女性によつて発案されましたものを、リーゼンフォード一族が綿密なものとした計画です。呼称を、『祭典計画』と。……説明を頼む」軽く彼が言うと、司会を務める青年が言葉を引き継いだ。

「まず、この計画を一言で言つてしまひますと、『実現が好ましくない未来を本当の意味で実現させないため、期間を決めて演技によって実現させればよいのでは』と言う事です。予見された場面をどうのような形であれ実現させてしまえば、覆せない未来は本当の意味では回避できるのですから。しかし全てが完全に演技であると、逆に矛盾も生じかねない点があります。ですから問題の空想上典型的な来訪者と思しき少女については、然るべき時期にこの世界へ渡ってきた適当な来訪者に、『あなたは聖女である』等といった知識を与えて仕立て上げるなどの措置をとるべきかと思われます。ただし、これについては人権などの問題から、審議を重ねる必要があるでしょうが……。尚、内々に打診しました所、問題の空想上典型的な来訪者らしき少女と共に居る所を予見された方の幾人かには、既にご協力いただけるとの回答を頂ました事を報告させていただきます」

そこまで言い切った所で、興味津々と言つたように資料をくまなく読み込んでいた、ディリトリシアの代表がぱつと顔を上げた。

未来視の件で全権を委任されているこの外交官の他にも、この会談の会場を提供したディリトリシアからは、第一王子アルフレートを始めとする数名の政財界の重鎮達が参加している。彼らもまたわくわくとした子供のような表情で、資料に目を通していた。

「祭りですか！面白そうですね。ディリトリシアとしては、是非この計画を実現させたいのですけれど？」

彼に賛同するように、ディリトリシア王国からの出席者は皆、それぞれ笑みを湛えて首肯した。ついでに王子に至つては、輝かしいばかりの笑みと共に、堂々とこぶしを握つて親指を立てた。

さすが、祭典民族とすら称されるほどに祭りを好むディリトリシアだ。祭典と名の付く計画ではあるし、興味は持つだらうとは思つてはいた。また、はたから見る分にはある意味面白そうな事態ではある。けれども想像以上の即決だった。

予想以上の反応に、クラウディオもまた軽く驚く。

それに続くかのように、周辺の国家からの参加者達も「いいです

な、我らへの実害もさほどなさそうですし』「むしろ、ある意味での本当に祭典とすれば、経済効果も見込めそうですね」と、人々に賛成の言葉を口にする。想像上典型的な来訪者に仕立て上げられるであらう来訪者の心配をする者は少ない。自国の民が良ければある程度は仕方ないといったほどに、彼らの殆どはえてして性格が悪かつた。

幾人か問題点を指摘する者も居たが、その後続いた長々とした協議の結果、その程度ならばどうにかできる、むしろ本当の意味での未来を実現させてしまつ方が拙い、と言う結論に達する。

最大の問題点であった、『祭り上げる少女の人権問題』は結局はその場では流された。

また『祭典計画を実行する場所』をどうするかと言う問題も、デイリトリシアの王子が嬉々として「それなら、我が国の領土内に限定させて実行しましよう」と名乗り出た事であつさりと決定された。尚、会談の終了後にこの計画が審議の後に一般に公表された時には、祭りを何より好むデイリトリシア国民が大いに沸いた事を記しておこう。

かくして、デイリトリシア王国では近隣諸国を巻き込んで、王家とリーゼンフォード一族の主導の下、祭りの準備が進んでいった。それはいずれ訪れ、いわば『好ましくない未来を回避するための、ある種の生贊』として祭り上げられるだろう来訪者の少女にとつては、酷く残酷な祭りであった。

祭典計画の展開される期間は、しかるべき来訪者の渡来より一年間。その間に予見された全ての事柄を演じきらせてしまう必要がある。

空想上典型的な来訪者として祭り上げられる少女は、『己は聖女であり、多くの人に敬われ、見目麗しい男性にかしづかれる』と言う、ある種の夢のようでもある一年間の後に、『それらは全て虚構であった』との現実を突きつけられるのだから。

けれど人々は来訪者一人の安寧よりも、一時の祭りと安全な未来

を選んだ。

人を無残に食らう魔物が蔓延り、世界を渡らせられたことによつて理不尽に、居場所や大切なものを奪われた来訪者達が、数え切れないので身近に存在するこの世界。

人々は、己の大切なものを守るために、無情であつても何かを切り捨てる事を知っていた。

そして、未来視達による一斉の予見より、およそ一年後。新芽の芽吹く春の終わりに、その少女は一人渡来してきた。

黒い瞳に、黒い髪の少女。その存在をいち早く察知した祭典計画の担当者は、突然の事に驚いて呆然としている少女の下に、『あなたは聖女である』と告げる役目である、この世界には存在しない『神』の演技手を派遣した。

同時に彼らはディリトリシア王国へ使者を飛ばし、祭典計画の最高責任者であるリーゼンフォード一族当主、クラウディオ・リーゼンフォードにその事を告げ知らせた。

そして、一時間の内に彼はディリトリシア国王に謁見し、祭典計画の開始を報告。

かくして。近隣諸国をも巻き込んだ、国を挙げての大祭である、その祭典は開始されたのだ。

Prōlogue 不思議の国のお祭り事情は、一の上から無く残酷でした（後書き）

作者：篠崎伊織

同作者の同名の短編連作より転載

祭典の準備を始める王宮には、三人の勇ましい将軍がいた

「祭典などばかばかしすぎる。この国の人間はのんきすぎるんだ。
なぜこんなことを国全体でやらなければならない」

ディリトリシアの王宮の中庭を、一人の男が歩いていた。一人は短く刈りそろえた黒い髪に青の瞳の男。もう一人はうなじでくくった長い金の髪に緑の瞳の男。どちらも細身だが鍛えてあることの分かる体つきをしていた。

この二人はこの国の軍のトップ、三大将軍のうちの一二人だった。

黒髪の男はアルトゥール・ボーデンシャツ、金髪の男はホラント・ベルクと言つ。

年齢はあるトゥールが23歳、ホラントがひとつ上。将軍と呼ぶにはまだまだ若すぎる者たちだった。

それもそのはず、彼らはほんの数日前に将軍になつたばかりだからだ。

もともと軍の中でも特に強く、リーダーシップのある彼らはいつか將軍になるだらう、といわれていた。だが、あくまでいつかであつて、それがいきなり決まったのは『生贊』の影響だった。

『複数の男をはべらせる聖女も、ジジイをはべらせるのはいやじやろうからなあ！はっはっはっ！』

といつて前の將軍たちはそろつて引退。はっきり言つと『見てる分にはいいが、参加するのはいろいろめんじくさいから若いもんに任せよう！』といった感じじゃないかとアルトゥールは考えている。ただ、これはお祭り嫌いのアルトゥールにとっては迷惑でしかなかつたが。

「いいじゃないか、皆が賛成してるわけだし。君のように反対して

る人間のほうが少ないよ？」

ホラントがいふと、アルトウールは鼻を鳴らした。

「ふん、俺が間違つてゐると言いたいのか？ 大体、国全体が浮ついて
いる間に隣国が攻め込んで来たらどうするんだ」

「大丈夫だよ。君が警戒していれば安心だろうし」

「お前ものんきすぎる。将軍に昇進したんだから少しは警戒しろ」「
そういうながらアルトウールは食堂の扉を開け……

開けて……頭を抱えた。

「お前ら何をしていい！？」

「いや、祭典の前祝い？ 将軍も一杯どうです？」

食堂では、兵隊たちが手に酒を持つて騒いでいた。

「祭典が始まつたからつて騒ぐな！ 逆に氣を引き締めろ！ 全員配置
に戻れ！」

アルトウールの鋭い声が食堂を走る。その声でつむさかつた食堂が
静まり返る。

が、

「いや、みんな騒いでてよし！」

元の配置に戻るつと兵が立ち上がつたとき、食堂の奥から声がかか
る。

「レオンハルト將軍！」

「アルトウールのいうことなんか気にしなくていいぜ。あいつの言
うことばっかきいてると疲れきつちまう」

そういったのは赤毛の男、レオンハルト・バルシュミーデだつた。
アルトウールたちと同じくまだ若く、一見將軍には見えない男だが、
彼が三大將軍の最後の一人だつた。

「レオ、お前……」

「よ、堅物男。どうせなら今日は思いつきついで騒げりやせ？ 明日からは
忙しいんだしよ」

レオンハルトの顔を見ただけでアルトウールの眉間のしわが三割り
増しになつてゐる。

「……そんなこと、許せると思つてゐるのか貴様！！」

「いいじやんか、いいじやんか。や、お前さんも一杯どうぞ」

「いるか！ふざけるな！將軍の自覚を持て！」

「怒つてばかりだと血圧上がるだ。あ、ぶどい酒のほうがいい？」

「だからいらん！！」

はあー、とため息をつくとレオンハルトがにやりと笑つていった。

「俺に勝負に勝つたら真面目に働いてやるぜ？」

「何の勝負だ。ポーカーか？チエスか？それとも剣か？」

アルトウールの問いにレオンハルトは何も言わずに酒瓶を田の前に押し出す。

「……酒か？」

「俺さ、お前と一回勝負してみたかったんだよ。何せお前、すぐに部屋に引っ込んでめつたに酒飲まねえからな。どうだ、やるのか？」

アルトウールは眉間にしわを寄せ酒瓶をにらんでいたが、やがて「受けよ」、「う」といった。

「よしあーお前ら、酒を山ほどもつてこいー」

「本当に俺が勝つたらしつかり働くんだな？本当だな？」

「男に一言はねえ！さあ、今夜は飲みまくるぜえ！！」

ひつして、王宮では王宮全体の兵が集まつた大きな宴会が行われた。

「おーい、生贊があと一時間で来るから早く準備……おー、生きてるか？」

「つむせこ、怒鳴るな、頭に響く……」

翌日の午前九時、生贊が来る一時間前に王宮中の兵があわただしく走り回っていた。

昨日の宴会で飲みすぎた兵は、頭を抱えながらよろよろと走り回つてゐる。

その中でもアルトワールは特に重症らしく、ホラントの肩を借りながら歩いていた。

「さすがに休んでたほうがいいんじゃない？無理しないほうが……」

「……将たるもののが休むわけには行かない……」

そういうものの、その顔は青白くやつれている。

「いやー、お前があそこまで酒に弱いとはな。ついつい飲ませすぎちまつたぜ」

「つるさいーそもそも祭典前に宴会など……っ」

怒鳴ったせいで頭に響いたらしく、また頭を抑える。

「俺の代わりにジジイどもを恨め。こんなに忙しいのも俺が宴会したがるものすべてジジイのせいだ

「確かに」

前の将軍たちは「じわって宴会好きかつめんどくさがりで、面倒なことはすべてこの三人に押し付けるのが普通だった。

「あと一時間休憩しているかい？」

「……いや、そんな暇はない」

そう言つとふらふらと中庭の井戸へと歩いていった。水を飲んできますつきりしようといふことらしい。

「さてと、まじめに準備しなきやね」

そう言つとホラント頭を抱えている兵たちに号令をかける。

「昨日酒を飲んだものは水でもかぶつて酒のにおいをぬいてこい！魔術師は来てるか？すぐに集めろ！適当に神秘的な雰囲気を出しておけ」とつておけーすべて終わつたら正装して大広間に集合ーーー！」

「は、はー！」

いつもは優しい印象のホラントだが、祭典の号令をかけるときは厳しい。これは、どうせやるなら徹底的にやるという彼の方針に基づいている。

「お前ら、生贊の部屋せぢやんと準備できてるか？」

「はー、ご覧になりますか？」

「あー、見てる暇はねえがしつかりできてんだな。あと、どうせな

ら鳥使いも準備させとけ。伝書用の鳥で歓迎させたらいい雰囲気が出るんじゃねえか？」

「分かりました。呼んでおきます」

「間に合わないようなら無理にやらなくていいって伝えとけ」

そこらを歩いていた侍女にレオンハルトがそう伝える。

「こんなもんでいかな」

「後は俺たちだけだろ。おーい、アルトゥール元気になつたか？」
まだ井戸の辺りにいたあるトゥールに声をかけると

「大丈夫だ」

という声が返ってきた。

その言葉どおり、顔色もかなりよくなっている。

「んじや、俺らも行くぞ」

「分かった」

そう言つと、彼らは大広間に向かつて歩き出した。

祭典の準備を始める王宮には、三人の勇ましい将軍がいた（後書き）

作者：柳リョウ

かくして我らは今日、神聖にして偉大なるべきであつた神を驕る

「衣装画の下絵、こんな感じでいいですかね？」

茶色の髪に青い瞳。まだ年若い青年が数枚の紙を提示すると、近くで言い争つたり作業をしたりしていた人々が、一斉にそれに群がつてきた。

描かれているのは、たっぷりとした薄布を幾枚も重ねて纏う、獨特の衣服の図案だつた。意匠の元になつているのは、青い目の青年セイルディイート・リーゼンフォードの故郷で信奉されていた、唯一神の装束だ。

流石にそのままそつくり同じよつことはないかないので、記された意匠はその神の装束とされていた衣服と、この世界の服飾と多少融合させたものだつた。

「へえー、セディイ君の所の『神』ってこんななの? 綺麗だねー。作りがいがあるわ」

「だな。俺の世界の神は、何か孔雀みたいに綺羅綺羅の派手派手だつたぞ?」

「本当! どれも私にふさわしい服装ね!」

さやうやからと彼らがはしゃぐ中、女がふつわりと微笑してうきうきと言つた途端、周囲の『神』役候補から抗議と主張の声が湧き上がる。

「や、『神』役はわしだから。お前じやないから」

「君たち、何言つてるの? 頭おかしい? 『神』を演じるのはこのボクだよ?」

長く白い髪を生やした老人が言えば、まだ十代始めと見受けられる銀髪の少年が吐き捨てた。

「いいえ、『女神』を演じられるのなんて、私しか居ないわ　この、第三の瞳を持つ私しか……！」

「ちょ、厨一病痛い！　お願ひだから俺の古傷えぐるような発言やめて！」

変わったところなど何もない己の額をすつと指でなぞつて言つたのは、紅の瞳を持つ女。そんな彼女の言動に、黒目黒髪の舞台係の一人が、耳をふさいで叫んだ。

なんとも、混沌とした光景であった。

セディこと、セイルディートの描いた衣装画は、あちらこちらで奪い合われている。取り合いで混ざつていない幾人かの衣装係や舞台係、道具係の面々が何とかその場を取りまとめようとしているが、殆ど効果が上がつていなかつた。中心となつて争奪に参戦している、現在正式に『神』役候補とされている面々は、数百人の『神』役希望者の中から勝ち上がってきた猛者だ。全員がそれはそれは個性的で、何より灰汁が強すぎる

これではそれぞれの服の意匠の説明も出来ないではないか。セイルディートは軽くため息をつくと、部屋の片隅に置いてあつた椅子に座つて、事態の収束を待つた。正に、触らぬ神に祟りなしである。

来訪者の一人であるとは言え、セイルディートは凡人である。この強烈過ぎる面々を纏められるはずがない。

祭典計画実行委員会、聖女擁立担当部署の『神』顕現係。

名前の通り、『聖女と祭り上げる予定の来訪者相手に、聖女であると告げる神を捏造する』事を任されている通称神係は、今日も今日とて騒然としていた。

祭典計画。それを正式名称とする祭りの協力者が募られたのは、三月ほど前の事である。

当時興味本位で公式資料を取り寄せたセイルディートが、書類に目を通し終えた瞬間、その場で祭りへの参加を即決したのは、ひとえに己の技能を生かしたかったからだ。

様々な部門に分かれている一般市民対象の参加枠の中に、衣装部門と言づ、彼の心引かれた単語は有つた。

祭典計画の開催が公布されたのはセイルディートがこの世界へと偶発渡来してきてしまって、そろそろ二年が過ぎようとしていた時期だった。

異世界からの渡来には、術式等によつて何モノかの故意ゆえに渡来してくる通常渡来、何の意思にも因らない偶発渡来、死後に精神を維持したまま出生という形で遭つてくる転生渡来、それ以外の特殊な例が当てはまる特殊渡來の四種類がある。

つまりセイルディートは、何の思惑にも関わらない純然たる事故で、この世界に遭つてきましたのだ。

渡来してくる前、彼は故郷の世界で、帝国の学院に通つていた。そこで幼い頃からの夢 王室付きの裁縫師となる未来を叶えるべく、日夜研鑽に勤しんでいたのだ。唯一神の敬虔な信者であり、また神官であつた父は良い顔をしなかつたが、母や姉妹はそんな彼の選んだ道を応援してくれていた。

けれど突然の渡来で、セイルディートの夢はあつけなく敗れた。まず故郷の世界とこの世界では、根本にある常識すら違つたからだ。神や魔法の存在の有無をはじめ、セイルディートの培つてきた認識は、この世界に来て大部分を変更せざるを得なかつた。

それは、裁縫に関する認識も、だ。針と糸で布をつなぎ合わせて衣服を作る。それは幸いこの世界でも同じだった。しかし、素材がまるで違うのである。イジモンの羽毛やカジヤル製法の絹と言つても、この世界では通じない。そもそもそんなものは存在しない。そういう言つ事なのだ。

必死に詰め込んできた知識は、殆ど役に立たなかつた。そしてこの三年間近く、学院の生徒から出自が特殊なだけ的一般市民となつた彼には、技術を生かす場も確保できていなかつた。新たな生活に馴染み、文字や常識を覚えるので手一杯だつたのだ。

けれど、ここ最近は生活にも余裕が出てきていた。それに何より

来訪者への配慮と援助が手厚い、渡来から二年の期限ももうすぐ切れる。自信を持つて自立したかった。

職場である仕立て屋での仕事も、それほど忙しいものではなかつたから、セイルディートはこの世界でも己が技術が生かせるかを知るいい機会だと思って、祭典の協力者の募集に応募した。

『聖女』と選ばれる来訪者は、望ましからぬ未来を回避するために一年間騙され続けると言う。つまりはある種の生贊として祭り上げられると聞いている。自分と同じように、不安がつたり苦しんだり悩んだりするだろう時期に、そんな状態に陥る来訪者の事は少々気にかかつた。けれど国家規模で動き出しているモノに、今更文句なども言えまい。

さて。セイルディートがそう割り切つて、自分の技術と経験を僅かでも生かすと、公募の面接を受けた結果、彼は見事に希望の衣装担当者として採用された。

しかし、その後担当となつた部署は、混沌極まりない『聖女擁立担当部署』であつたのだ。

およそ数百名の希望者を押しのけて、激戦を勝ち抜いてきた三人の『神』役候補と、それぞれ五人ずつ居る衣装係、舞台係、道具係。そして彼らのまとめ役であり、雑用や事務作業を担当する一名。計二十名の『神』係は、この世界に存在しない『神』と言つ存在を作り上げるのに適していると判断された者ばかりだ。

『神』役候補の三名も、容貌はそろつて人間離れして麗しかったり、柔らかな母性に溢れていたり、威厳さえ感じさせるほどに静謐だつたりと、それぞれが何処と無く『神』らしい特徴を備えている。内面はそもそも自ら熱烈に『神』たる事に志願し、競争者をばつさばつさとなぎ倒してきたほどであるから、別に神々しいわけではないが。

舞台係や道具係も、幾人かは神や神への信仰が存在する世界から渡ってきていた来訪者だ。皆神話をはじめとした神に関わる文化に造詣が深い。勿論セイルディートも神官である父に、幼い頃は跡継ぎ

となるように育てられていた分、故郷の神殿文化にはかなり詳しかった。そつ、彼がこの神係に配属された理由は、その事も大きい。

渡来前はひたすらに鬱陶しかつた父の影響が、まさかこんな所で役に立つとは。

少しばかりの感傷と懐郷に浸りながら、セイルディートがぼんやりと「私が神よ！」だの、「違うねボクだよ。わかつてないな、今時代はツンデレ系生意氣少年神なんだよ？」だの、「ええい、老人に花を持たせつうぐがあつ」、「おい、ジルクーダ爺さんの入れ歯が飛んだぞ！ 誰か拾え！」、「嫌です」だのと言つた言葉が飛びかうその騒動を見ていると、唐突に部屋の扉が開かれた。

響いた音はあまりに大きく、室内の騒ぎはぴたりとやんだ。

扉を開いた人物に、一斉に注目が集まる。扉の取っ手を掴んだまま息を切らし、栗色の髪を肩まで流している、黒い瞳の小柄な女へ。「ショイラさん、大丈夫？」

舞台係の四十代ほどの女が駆け寄つて声をかけると、ショイラは荒い呼吸を繰り返しながら頷いた。この部屋まで走つてきたのだろうか、少しばかり髪も乱れている。

彼女は二名しかない神係の事務員だ。はるばるリゼンシュトーザ王国から、この祭典の為に派遣されてきた、数十名の内の一人である。『神』顯現係の長であるのは、数十年ほど以前は神官として働いていた中年の男だ。彼 ライナー・リーゼンフォードは当然ながら来訪者であるから、均衡を保つ意味合いもかねて補佐にはシェイラが付いたのだ。

セイルディートも慌てて立ち上ると、わらわらと彼女の方へ集まる人々に倣つた。基本的にこの部署は濃い人物が多いが、最初の打ち合わせの時点から仲間意識も強かつた。

「あの、大変、なんです！」

呼吸も落ち着いてきたシェイラが、唐突に顔を上げて言った。

「どう言つ事さ？ おねーさん？」

銀髪の『神』役候補の少年が、首をかしげてたずねると、彼女は

「それがですね」と、ゆっくりと深呼吸してから言った。

「来訪者　『聖女』たるべき『生贊』の来訪者の渡来時期が、予見されました」

「ほう……何時じや？」

「今から約三ヶ月後です。三月後の、五月の上旬だそうです」

ジルクーダ老の問いに答えたシェイラの言葉に、先程にも増して周囲からは様々な叫びが上がった。

舞台係や道具係の間では、「空間演出の術式構成間に合わねえ！」とか、「えええ、設計図もまだなんですかけどー？」と、言つた悲痛な思いが木靈した。

一方衣装係の面々は、即座に顔を突き合わせると、先程セイルディートが提出した衣装画の下絵を吟味し始めた。勿論セイルディートもそれに加わって、それぞれの意匠に解説を加える。が、次第に怒声交じりの意見交換となつていくので、かなり騒がしい。

一方、最も静かだったのは、先程まで場を引っ搔き回していた『神』役候補たちだった。「仕方あるまい、時間は限られておるしの。おぬしら寄れい、妥協案じや」と言い放つた老翁に手招きされ、なにやらこそそこと密談を始めたのは、シェイラが一人落ち着いている舞台係の女から、水を一杯貰つて飲み干した頃。

この日を境に、割とのんびりと作業を進めていた神係の面々は、かなりの忙しさにあえぐ事となつた。

何しろ、時間は残り三ヶ月しかない。しかも『神』を最初に顕現させるのは、『生贊』の来訪者の渡来直後なのだから、失敗や遅れは許されなかつた。

さて、神係以外の他の部署も、その多忙さは同様だつた。

『聖女』が滞在する予定のディリトリシアの王宮では、使われていなかつた離宮の一つの内部の、大々的な改修工事が始まつた。

国内外の学校では、祭典計画に関するお知らせが保護者と子供達に配られたし、計画の要を勤めるリーゼンフォードの本家でも、当主クラウディオを筆頭に祭典計画の業務に割かれる時間が大幅に増

えた。

ついでに、『ティリトリシアの王都の商店街で、『各店連田限界まで大安売り！ 祭典開始まで生き残れるのはドコだ！？』などと言へ、少しばかり経済的に危険な前夜祭が開催された為に、世の戦う主婦と主夫の皆様は歓喜した。

けれどそんな三ヶ月も、無常にも瞬く間に過ぎ去つてゆく。

『聖女』となるべき来訪者が渡来されると予測された、『ティリトリシアの王都近郊の森の奥。

神係の面々は、記録装置やら防寒用具やらを完全装備して、朝靄漂う春先の森の、木の影やら枝葉の上やらで待機していた。

しかしながらあちこち隠れながらも、衣装係の面々は、『『神』役の着付けの最後の直しに追われているし、道具係は舞台係と一緒にになって、最後の大仕掛けで忙しい。勿論『神』役も台本の見直しに集中しており、本当にのんびりと『聖女』の来訪を待つ已被られたのは、事務員一人だけだった。

「ああ、ちょっと、あんまり歩き回らないで下さいね！？ 服に土が！ 褍に土が付く！」

セイルディートの『神』役に対する叫びを聞きながら、シェイルはほう、ため息をついた。

「ライナーさん……とうとうここまで来ましたねえ」

「うん、来たねえ……あ、何か感動で涙出てきた」

「泣くのは成功してからにしてくださいねー。まあ、頑張りましたもんね、私たち」

「本当だよ。私も奥さんに、何度も『残業は許さない』って言ったですよ！？」つて怒られた事か

リーゼンフォード一族の一員でもあり、故郷の世界では焰の神を信奉する神官でもあった彼は、今までの日々を懐かしむように言った。

ようやく正式な神官と認められたばかりだった、十代の終わりに渡来してきた彼は、今回の祭典で『神』を捏造するのに、やはり

最初は抵抗があつたらしい。

けれど、この世界に神と言つ存在はない。在るのは、『世界の意思』と認識されている、ラグナーシャと呼ばれる唯一神に似た存在だけだ。

けれど様々な世界から、放り出されたり追い出されたり、零れ落ちてしまつた人々を渡来と言う形でを受け入れているラグナーシャは、神ではない。それだけは確かに、明確な事実だった。

そんな世界で、数十年を生きてきたのだ。ライナーとて生粋のデイリトリシア国民である妻とも結婚したし、子供も居る。いくら過去、多神教の内一柱の神の神官であつたとはいえ、彼の神に対する意識も、この世界での生活で大分変わつてきていた。この仕事を引き受けたのは、だからこそ、でもある。

ライナーは諸々の支度を終え、本当の意味で待機態勢に入つた部下達を見て、静かに呟いた。

「『其は焰、命の宿り木である。其の揺らめきは神聖にして、其の領分は侵すべからず、嗚呼、幸いなるかな、我らに恩恵与えし母よ』

「呪文、ですか？」

不思議そうに、シェイルが聞いた。

「いや、祈祷文だよ。何十年も昔に覚えたね。……懐かしいなあ」「ほくほくと、ライナーは目を細めた。

過去、それほどに不可侵の存在であつたモノを、まさか騙る事になるとは。

少し哀しくもあつたが、心にはわくわくとした好奇心も同居していた。

あわただしくして いた神係の面々が、それぞれの配置につく。もうすぐ、『聖女』来訪と予測されている時間帯だつた。

ライナーとシェイルも、念のために姿を認識させない結界を張つて待機する。

それから、十五分ほどたつたころだろうか。

パシン、という高く澄んだ音と共に、空間が歪んだ。

そして、その歪みから、森の中へと落ちてくる少女が一人。胸元ほどまでの黒髪に、黒い瞳のその少女。間違いない。予見された少女そのものだ。

ライナーが静かに合図をすると、瞬間、様々な術が発動される。少女の周囲に結界が張られ、外部からの音が遮断される。同時に森の中に神秘的な光も降り注がれ、風が止んだ。

そして浮遊の術で中空に浮かんだ銀髪の少年が、衣をふわりとなびかせて降りたつた。

銀の髪をなびかせて、呆然としている少女の下へ、はねるよつて歩み寄る。

「見つけた、僕らの『聖女』」

彼は笑みと共に、声に嬉しさを滲ませた。幼いとは言え、さすが『神』候補に選ばれた事はある。演技は完璧だった。

「え……？ 君、誰？」

少女が目を丸くして尋ねると、少年はぐるりと彼女の前で振り返り、森の奥へと叫んだ。

「姉さん！ 見つけたよ！ 僕らの『聖女』だ！」

心の底から、嬉しそうに。

少年は長い袖に風を纏わせて言った。すると、森の奥から鹿や栗鼠と言った森に住まう動物達を引き連れて、若い女が遣つてくる。若葉色の布を全身に纏つた、さながら貴婦人のような、けれどそれでいて母性に満ち溢れた、赤い瞳の女だ。

「まあ。あなたが、そうなのね？」

ふうわりと微笑して、彼女は少女に視線を遣つた。

少女はどきまぎと、「あ、あの？ ええっと」と、動搖の言葉を連ねている。

「あなたたち、誰です？ それに何で、こんな所に急に……」

こんな所に、とは、自分の事だろうか。

女は内心首を傾げたが、それでも演技を続ける。

「あなたが、『聖女』だからよ」

神々しささえ纏わせて女が言つと、隣に寄り添う少年も麗しいばかりの微笑を浮かべた。

「せい、じょ？」

「そうだよ！ 君は僕らの『聖女』！」

「そして、この世界の救い手じゃ」

少女が黒い瞳を瞬かせて疑問を言葉にすると、少年と女の後ろから、柔らかな光と共に、白鬚の老人が現れた。

祭典計画『神』役の揃い踏みだ。

「吾が名は、明かせぬ。何人たりとて口には出来ぬ。けれど、人の子らは我らをこう呼ぶ。『均衡の統べ手』、『神』と。白い衣服に身を包んだ老人が、少女へ向けて静かに言つた、その瞬間。

防音結界の外では、隠れてその光景を見ていた人々の、こらえ切れなかつた笑いの数々が響き渡つた。

「やつぱい、爺さん完全にはまり役！」

「お腹痛いお腹痛いっ！ もう、何、あたしのこと、笑わせ殺したいんですねかあいつら……っ！」

「お前ら堪えろ！ 無理かもしねいけど堪えろ！」

あたりではかしゃりかしゃりと、記憶装置が作動する音が聞こえる。

同時に爆笑しながらも舞台係や、それを補助する道具係の面々は、必死になつて術を作動させ続けていた。

一方大方の役目を終えた衣装係たちは、ライナー・やシェイルの居る結界の中へといつの間にか移動しており、そちらはそちらで笑いつつも衣装の心配をしたりと忙しい。

結局、『神』役候補は三人とも『神』役となつたのだ。

事前の『設定』では、この世界は一神教を信奉しているとの事だったでの、変更には苦労した。

けれど結局、唯一神である老人と、その娘と息子である半神一人

の神話を加える事で、三人の『神』の顯現が実現した。

この辺りは、何気にディリトリシアの経済界の重鎮の重鎮の舅だつたりする、ジルクーダ老人の伝手がきいていたのだろう。

「成功、ですかね」

ライナーが感慨深げに言つた。

結界の中で、少女は「聖女とは、何をすればいいのですか」と、無垢な眼差しを『神』役たちに向けている。

シェイルはそれを目に留めると、少しばかり困ったように微笑した。

「そうですね。これでひとまず、我ら聖女擁立担当部署、神顯現係の、大きな最初の仕事は終了、ですか」

それは即ち、祭典計画の本当の意味での開始の、合図となる一言でもあつた。

かくして我々は今日、神聖にして尊ばれねばならぬた神を驕る（後書き）

作者：篠崎伊織

同作者の同名の短編連作から転載

真っ赤なイチゴは落ちてゆき、砕けて散つて染み込んだ

五月の連休前に告白されて付き合い始めたのだから、あたしたちは、三ヶ月弱の交際期間だつたところとなる。

「事情ついで、なによう………！」

出た声色はあたしが思つていた以上に未練つたらしく、恨めしそうに聞こえた。

今日、別れ話を切り出されることなんて、わかつていたことなのに。そう。予測できていた。

彼がクラスメイトのほのか先輩に告白されたことは、聞きたくなくてあたしの耳には入つてしまつてしまつたし、一人が廊下でなにやら微笑み合つているも一度目撃していたから。

「事情つていうか、その、……別に、好きな子が、できたんだ」

一コ上のセンパイ。あたしが入学したばかりの四ヶ月前には、頼もしい男の人見えた。少なくとも、それまでのイモか石ころのような男子たちとは違つて見えた。それはたしかだ。

ヤミの鳴き声が聞こえている。

夏祭りの人出で通りはにぎやかだ。

ぬるい、毎間よりもいくぶん涼しい風が吹いて、あたしの長い、

真っ白なキャミソールワンピースのすそが揺れた。

うつむくあたし。ゴーズド風の「チーム」の青さといい感じの生地のほ
ころびが田に入る。

まだ一回しかはないのですが、この長い年はきじんだよくな
表情。イケてるでしょう？

バカ。

浅はかなダメージ加工だ。

西の窓はまだ明るいのに、あたりはもうすいぶん暗くなつてきた。

「もうか……」

やつと、ため口がなじんできていたのに。

初めてできた彼氏だったし、この二ヶ用間のドキドキは本物だった。

「わかつたよ」

「……悪い」

「あやまちなこで。」ればかりはしょうがなこよ

「悪いな、里奈。」めん

あたしは、どう無難に別れようかと考えだしている自分に嫌気がさ
していた。

いつからそんなに自分に素直じゃなくなつたんですか？

まだ高校一年生なのに、はじめての別れのシーンなのに、どうして
こんなに冷静に頭が回転してゐるんですか？

「俺、別に、里奈が嫌いになつたってわけじゃないんだ」

はい？

何を云ひてゐるんだこのひとは。

「部活でもや、これまでみたいに接してよ。頼むな」

あきれた。

「こまでも自分勝手なひととは思つてなかつた。

なによ、じゃあ、ほのか先輩のこと好きになつたのに、あたしの
ことも同時に好きつていうこと？

なんで同時に一人の異性を好きになれるの？

そんなのつて考えられない！

男子つてみんなそうなの？！

怒りからか、汗が噴き出してきた。

インナーに来ていろ薄むらわき色のキャミの胸元に、汗がにじんだ。

そつこやつちのお兄ちやんも、パソコンで、女の子ばかり出でぐ
るゲームやつてたなあ。

どの子がヒロインなのつて聞いたら「みんなヒロインだよ、ある意
味な。だれを狙うかで、その女の子がヒロインになる」みたいな、
意味がよくわかんない回答があつた。

「ハーレムは男の夢だからな」だつて。

バカ。

浅はかな夢だ。

高校に入つて、親友の千尋に誘われて入部した演劇部。入部してひと月足らずで先輩に告白されて、あたしは人生で初めて「彼女」つてものになつて。

秋の文化祭に向けていよいよ練習も本格化してきたこの時期に、別れ話とは。

……あ、やばい。

千尋つて、ほのか先輩になつてゐるんだつた。

ほのか先輩もほのか先輩だ。

あたしとセンパイが付き合つてゐること、知つてゐるはずでしょ？
それなのに告白するなんて。

略奪愛？ そんなにいい男だろうか、こいつが。

……あ。

ハハ。もうすでに彼に愛着を無くしてゐる自分がいる。

彼はそれじゃねとかなんとか、猫なで声のよつなものを発して、あたしから去つた。

なんかよくわからないうちに、あたしは夏祭りが催されている町はずれの付近で、一人たたずんでいた。

茫然。
自失。

頭の一部が働かず、でもどつか一部が猛回転しているような感覚。

心のどつかが麻痺していて、でもそれ以外はマイナスの感情にぐらしているような感覚。

お母さん、これが失恋ですか？

はい、そうです。

答えを自分で出すな、自分。

とぼとぼ歩くあたし。

むき出しの肩にふれていぐ初夏のそよ風。

大音量で流れる有線。よりによつてあたしが好きなラブソング。こんなときに聴きたくない。この曲が嫌いになつたらどうしてくれるんだ。もしそんなことになつたら、あたしはセンパイとほのか先輩を一生恨むだろう。

ぼんやりした頭。

じんわりと汗が染みたキャリ。

しつくりとなじむ履きはじめて一ヶ月たつた白のスニーカー。

明日から、部活どうしよう。

気まずい。

行きたくない。

何よこの人間関係。

ほのか先輩のバカ。ほんわかした名前のくせに、全然ほんわかしてないじやん。

千尋も千尋だ。なんであんな女になついてるんだ。

……居場所、ないんじゃないだろうか、あたし。

なによう、このシチュエーション。

いやだ。
逃げたい。

土手の上を力なく歩くあたしに、夕暮れの生ぬるい風が吹き抜けて
いく。

……帰ろう、家に。
予定よりもずいぶん早い帰宅日、お母さんもお父さんも理由を尋ね
るだろうか。

ちりりん

近くで風鈴の音がした。

ううん。近くじゃなくて遠くからかな。
だってまわりには家もないし、風鈴を釣つていようつなものも見あ
たらない。

……おかしいな。

たしかにいま、風鈴の音が聞こえたのに。

自転車が通り過ぎたのに気づかなかつたのかな。
自転車のベルにしては澄んだ音だつたのに。

あれ？

耳元で、
そばで、大勢の声がする。

あれ、この曲

あたしの好きな、ラブソングの最後の部分
どうして？

あたしは周囲を360度見渡した。

人の姿はない。

なのに、いろんな音が聞こえてくる。

え、ええ？

風景が

あたりの景色が大きくぐにやりと歪んだ。

ぱしん

足元のどこか低い場所で、なにかがはじけるよつた澄んだ音が聞こえたような気がした。

なに？ なにが起きたの？

周囲の音も、見渡す景色も、肌を吹き抜けていた川沿いの風も、なにもかもが一緒に混じり合つた。

ぐらん

音と色と肌触りが混同されるその渦流の渦に、自分の身体も心も巻

き込まれていいくんな ！

うわ つ？！

あたし、という存在のあれこれが、
中に浮かぶような奇妙な気配、と、その直後に、

落下していく、感覚 。

落ちていく。

もののすごいスピードだ。

落ちる。

あたしは落ちてこつこつ。

落ちる ？

方向なんてわからない。

落ちているのか、それとも上昇しているのか、

その問いに、意味はあるのか。

速いスピード？

本当にあたしは移動しているのだらうか？

もう、はつきりとした景色もなにも、田には何も映らない。

音も、轟音が聞こえていたような気がしていたのに、耳を澄ますと
静寂だ。

この世界のいちばん低いところから、
もうひとつ下に、落ちた。

雨粒のひとしづく。

宇宙のように広大な空間を、
落ちていくアマジブ。

雨粒はふつう、たくさんのが、無数の雨粒がいつぺんに降る。それが
雨だ。

あたしは ひとつぶで落ちていく。

あたし アタシって、
なんだ？

そうだ

遠藤里奈、という名前の
誕生日が来たばかりの
十六歳の女子高校生

といつ記憶は

ほんとうにあたしのもので
これまでの時間や人生は

ほんとうにあたしのこととして実在していたのだろうか

それすらもなんだかたしかだと
実感できぬいよつなほんやうとした意識の中で

もつ里奈といつ魂は

ほんとうにただのアマジブのよひなひとじゅくとなってしまつてい
た。

遠藤里奈だった心や身体は、宇宙空間の「ごとく広い」、どこまでも限りなく広大な空間を、まっすぐには落下していった。

里奈は自分を肌色だと認識していたけど、里奈の中身は赤かった。

真つ赤なイチゴのような色。

全身をすみずみまでくまなく駆け巡っていた、血液の色とか、そういうものの色。

赤いイチゴの一粒。

薄明るい空間。

落ちるミクロの雨粒。

その空間には、巨大な“樹”が在った。

惑星のように大きな幹

恒星のように大きな幹

銀河のように大きな根

極小の水滴が、どんどん落ちてゆき、

ついには広大に張りめぐっている根っこの一端に到達する。

雲ははじけ散った。

真つ赤なイチゴのように砕けて散った。

はじけ散つたといつても、宇宙のように大きな樹の根っこからみれば同じ場所に落ちたのと同じで、その雫は、根に吸い込まれてゆき、またひとつになる。

時が流れる。

悠久の時の流れ、と云えるのか否か。

時間の流れの速さを計る存在はこの空間にはいなかつた。だから、刹那も悠久もその定義に意味はなかつた。

星が一周する長さなのか
泡のはじける短さなのか
大地が生まれる長さなのか
火花が散る短さなのか

比べるものはいなかつた。

雫だったモノは、やがて根の中を通して、樹の幹に至る。大きく広い茎のような場所を通過し、樹液が茎を通して枝へ、枝先と運ばれるようこ、元も枝先に到達した。

花が、開く。

花が、世界へ開く。

開いた花には、実がついている。

実は、少しだけ育ち、形がはつせつとしてくる。

そして

うたたねの中での不確かな意識の「」とあいまいな時間が流れて、

実が花から離れる瞬間が訪れる。

その瞬間

里奈の魂と身体と心と精神は、
この世界に存在していた。

落ちていた　と思つたら、浮かんでいた。

落ちてからどのくらい経ったのだらう。

頭はぼんやりしている。

とても、ねむい。

おやろしく、ねむたい。

音は、依然として何も聞こえない。

だけど、視界ははつきりしてきた。

下の方に、木々の葉や枝が見える。

森の、上空に、浮かんでいる　?

なんなのよお

あたしの頭上、空の上。
数え切れないほどの鳥たちが見える。
あんなに高いところにいるのに
あんなに大きい

大きな、白い鳥たち。
空高く、飛んでいる。

下を見る。

木々、枝葉、小さく見える花々。
森だ。

あの蒼穹を舞う鳥たちと、足元に広がる森林との間の空間に存在しているのは、あたしだけ。風も吹いていない。

音もない。
匂いもしない。

あたしは、いつたいどこにいるんだろう?
なにに巻き込まれたのだろう。

いろんな色彩の光が降りそそいでいる森林のただなかへ、あたしはゆっくりと降りてゆく。

(え?)

人影が、視界に入った。

おどじのじ

?

少年が見えた。

「あら見ているのがわかる。

降り注ぐ光にきらめく銀色の髪。
身にまといこる、見慣れない衣装が、ゆるやかになびくのが、
……きれい。

「みつけた。ほくらの、『聖女』」

そう聞こえた。

あたしには、そういう意味が伝わった。

「え？」

声が出た。

いつも、あたしの声だった。

遠藤里奈の、声だった。

「あみ……だれ？」

銀髪の少年はほほ笑んだ。

きれいな顔立ちだった。

これまでの人生であたしが目にしたどんな顔立ちの人よりきれいな

顔立ちだつた　。

意識が遠くなる。

むき出しの肩にふれる空氣がすこし冷たい。

“聖女”って、“天女”みたいなひと?

あは。

すその長い真っ白なキャラソンペが、羽衣のよつて見えなくもない
な……。

バカ。

浅はかな比喩表現だ。

そんなことを考えたのを最後に、
どんどん意識が薄れていく。

少年のほかにも、人影が見えた。

声も聞こえてくる

あたしも、なにか返事をしているんだけど、
その声が自分が発しているものだという感覚も薄れてゆき

ぐりん

あたしは、気を失うよりも深い眠りに落ちた

。

真つ赤なイチゴは落ちてゐるが、砕けて散つて染み込んだ（後書き）

作者：さくらい物書き

砂漠の王女の好奇心は、止まないことを知らぬかのよひ

その方の爆弾発言には、慣れたつもりだった。呼吸をするよりな感覚で物凄いことを仰るのだから、慣れなければ彼女専属の侍女など務まらない。だから、慣れざるをえなかつたのだ。やつ思つていた。

……だけどそれはあくまでも普通の爆弾発言に限つたことだと、私は思い知らされることになるのだった。

それは、とある夜のことだった。

「ヒラ、ヒラ！ 何処にいますの？」

「ここですわ、レティシア様。お疲れでしょ、今日せむつお休みにならでは？」

「ええ、もちろんそつしますわ。だけどねヒラ、お父様やお兄様、シルヴィの話を聴きまして？」

その輝く蒼い瞳に嫌な予感を覚えつつ、心当たりが無いわけでもなかつたので答える。

「祭典計画、でしたかしら」

「ええ！ 面白そうな響きだと思いませんことー？」

「……そうですね、確かに面白そうな響きであることは認めますわ。ですがレティシア様、一体何処でそれをお知りになつたのです？」
いつこのことになるから、国王陛下や王子殿下はレティシア様にこのことをお話にならなかつたのに……
訊ねると、彼女は目を輝かせながら話してくれた。

* * *

今日の午後のことですわね、私はいつもお父様やお兄様との静かな食事を終え、家庭教師の待つ部屋へと向かおうとしました

たの。仮にもこの国の第一王女ですもの、王位を継ぐのはお兄様とは言え、私にも覚えるべき」とはたくさんありますわ。ですから私も……勉強は嫌いですけど、お父様やお兄様のため、覚えるべきことを覚えるのは当然と、日々勉学に取り組んでいるのですが、……今日は私にとつてそれ以上に大事な用が、出来てしまいました。

『祭典計画』

そんな単語が、通りかかった部屋の中から聞こえてきたのです。祭典！ 祭典つてつまり、お祭ですわよね？ 何で楽しそうな響き！

更に話を聴いてみると、どうやら部屋の中で話しているのはお父様やお兄様を含む国家の重臣が数名、そして一人の女性のようでした。

その女性の声にも、勿論聞き覚えはありました。私だって国に貢献している家臣の名くらいは覚えてますわ。それはどうやらシルヴィのようでした。ええ、未来視のシルヴィ・リーゼンフォードですわ。

彼女が前に変な未来を覗たと言っていたのは知っているでしょうけど……どうやらそれを危惧したディリトリシアとリーゼンフォード一族が話し合つたらしくて、その『変な未来』を食い止めるために発案されたのが『祭典計画』らしいのですわ。

何でもディリトリシア王国全体で予見された全ての事柄を演じる……などという大きな計画らしくて、そのためには近隣諸国にも協力して欲しいと頼まれたらしいのですわ。それが三ヶ月前。

今回は『聖女』役の少女がもうすぐ来訪してくるから、と連絡が来たらしいのですけど……

って、そんなことはどうでも良いんですよー

祭ですわ、祭！ 何でこんな楽しそうなことを教えてくださいなかつたんですね、ヒラ！？ それにお父様も、お兄様もですわ。今日は部屋に踏み込むわけにも行きませんでしたが、勉強中もずっと考えていましたのよ？

で、夜になつたらヒラに訊こいつと結論付けたのですけど……ひとつ
ぜん、答えてくださいますわよね？」

＊＊＊

話を終え、じつと私を睨みつけるレティシア様……この国、アズ
ファーダの第一王女殿下、ちなみに十七歳。一応彼女専属の侍女と
いう立場にある私は、彼女に向けて嘆息した。

「……何故レティシア様にこのことをお話しなかつたのか、ですか
「そうですわ！ ヒラは当然理由を知つてゐるのでしょうか？」

「もちろん」

頷きはしたもの……話さなきやいけないのかしら。嫌だなあ。
この方絶対怒るよなあ。陛下も殿下も、絶対私に面倒なことを押し
付けるつもりでみんな提案したよなあ。

……腹をくくりますか、仕方ない。

「ええとですね……理由は、レティシア様なら絶対にそんな反応を
するからだ……と、私は聽きましたが」

「そんな反応つて……どんな反応ですか？」

「そんな反応、です。レティシア様は好奇心を抑えると言つひとと
知らないご様子ですので」

「失礼ですわねえ……仮にも王女にそんなこと言つて良いんですの
？」

「この程度の発言に怯えるようではレティシア様専属の侍女など務
まらないこと、貴女が一番良ぐ存知かと」

「それもそうですわね」

あつさり納得する辺り、この方も一応自分の性格はしつかり分か
つてゐるのだらう。

だけどまあ、分かつてゐると自歎するのとは別なわけで

「さて、それじゃ行きますわよ、ヒラ。幸い今日は勉強の予定もあ
りませんし」

翌朝。身だしなみを整え、朝食を終えたレティシア様は、当然そ

んなことを言つてきた。

まあこの程度で戸惑つようじや、とつぐに職を失つて路頭に迷つているわけで……私はいつものように冷静に、王女に向かつて問いかける。

「どこへですか、レティシア様？」

「ええと、まずはお父様やお兄様、それにシルヴィのところでしょう。それから……まあ、着いて来れば分かりますわ。ほら、せつさとなさい！」

主に言われてしまえば、あくまでもただの侍女である私に断ることなど出来るはずもなく……かくして今日も私は、巻き込まれるのだった。

「失礼致しますわ」

国王陛下をはじめとする国のトップは今日もまた『祭典計画』について会議をしている、という情報を私から手に入れたレティシア様は、返事も待たず会議室に乱入する。

当然部屋にいたメンバーから注目が集まり……私はとりあえず頭を下げる。

「……申し訳ありません、隠し通せませんでした」

「あら、ヒラは私の質問に答えただけでしょう。それで良いのですわ。私専属の侍女なら私の言うことを聞くのは当然ですわよ？」

庇ってくれたつもりなのか……私へのお咎めは無く、レティシア様はそこにいたメンバーに『祭典計画』のことを確認する。

昨夜私がしたものと同じような説明を聞き終えると、彼女は満足そうに頷き、私の方を見た。

「そういうわけで、お父様にちょっと相談がありますの。ヒラはちよつと廊下で待つていなさいな。別に聽かれても大した問題じゃありませんけれど、今はその方がスムーズにことが進みますわ」

「どういうわけか知りませんが……一体何のお話をされるのです？」

「それは後で話しますわ。どうせ分かるでしょうし」

……この王女様に対してもう一つ言ひ返すことがどれだけ無駄なのかはよく知つてゐる。

「分かりました、では廊下で待機しています。……ちょっと良いかしら、シルヴィ？」

「何？……陛下、少々席を外させていただきますね」

席を立ち、私について廊下を出るシルヴィ・シルヴィ・リーゼンフォード。未来視の力を持ちアズファーダ王室に仕えている、八年前に偶発渡来してきた女性である。来訪者の多くがディリトリシアの国民である中、リーゼンフォード一族でありながらディリトリシアの国籍を持たない少数派の人間の一人だ。ちなみに私より一歳年上の二十一歳。

全体的に瞳も髪も黒っぽいこの国では目立つ、向日葵色の髪に蒼い瞳。渡来してきたときは白かった肌は流石に日に焼けて、アズファーダの国民のそれに近い色になつていて、初めて会つたときは羨ましく思つたりもしたものだ。

「エラも大変だねえ……で、何？」

「他人事のように言つてくれるわね、シルヴィ……貴女も大変そうだなあと思つて。仕事のときは引き籠もつてゐるか、そうじやないときは適当に遊び歩いているかの人間がいきなり国王陛下や王子殿下、それに國のお偉いさん方と会議でしょう」

「失礼だなあ、一応未来視の仕事のときは直前に陛下に謁見してゐよ……まあ、流石にあそこまで息が詰まる会議は初めてだけださ」

「でしおうね。多分これからもつと増えるわよ、そういう会議」「うげえ……」

心底嫌そうな顔をする友人に、私は一番重要なことを言つておく。

「そうそう、その間、私から助言は出来ないと思うわ

「へ？ 何で？」

「どうもレティシア様、何か企んでいそうだから……下手すると私、しばらくこの国を離れなきやいけないかもね。レティシア様が国を離れると、私もついて行かなきやいけないでしょう

「……『祭典計画』関連で？ まつたくあの王女様、むしろティリトリシアの国民党に近い性格だよね……」

「流石にもう慣れたし、もうあの方も私にとっては王女様と言つよリ『ワガママな妹』って感じだつたりもするのだけどね……と、噂をすれば」

ドアが開く音に振り返ると、ちょうどそのワガママ王女が部屋を出てきたところだった。

彼女は僅かに不機嫌そうな顔で私の方へと歩み寄つてくる。

「まったく本当に恐れ知らずですわねえ、ヒラ？」

「事実でしょ、レティシア様」

「それは認めますわ

「認めちゃうんだ……」

驚くシルヴィに対し、私は軽く手を振る。

「じゃ、そういうわけで私は行くわね。貴女はさっさと入らないと、会議再開出来ないんじゃない？」

「あ……そうだった！ レティシア様、それではっ

「ええ、御機嫌よう」

答える王女の晴れやかな笑顔を見る限り、どうやら陛下への『相談』とやらは上手くいったらしく……私の嫌な予感は、膨れ上がるばかりだった。

続いてレティシア様が足を運んだ場所は、騎士団の訓練場。……もうここまで来ると嫌な予感は確信に変わっていたのだけれど、放置するのも怖いので一応訊ねておくことにする。

「レティシア様……兄に、何か御用なのですか？」

「ええ、すぐに説明しますわ。……と、いましたわね。アラン！」

彼女が声を張り上げると、それに気付いた一人の騎士がこちりへやつてきた。

「この国の殆どの人間がそうであるように浅黒い肌、黒髪に黒目。そして私とよく似ているらしい顔立ちのその騎士の名は、アラン・

バルシュミーネ。

私と同じ姓を持つ彼は要するに四歳年上の私の実の兄であり、最年少で騎士団の小隊を一つ任せられる程度には腕も良いエリート騎士なのだった。

「どうも、レティシア様。うちの妹まで引き連れて何の用です？」

私と同じ、いや私以上に碎けた口調の兄。まったく王女相手に……とか思いつつ、私も人のことは言えない上にレティシア様も気にしていないうつなので放っておいているわけだけど。

「兄さん……とりあえず、今は返事しないで逃げるべきだったわ。脱兎の如く」

「は？ 何言つてるんだエラ、王女様に呼ばれて無視する馬鹿はないだろ？」「うう」

「まったくですわ。……といひでアラン、『祭典計画』のことは聴きまして？」

「ああ、ディリトリシアでやるつていつ……あががどうかしたんですか？」

「面白そうじやありません」と？

「…………まさか」

王女が何を言つたか、よつやく予想出来たらしい兄の顔が強張る。ああ、だから言つたのに……

「お父様に許可も頂きましたし、私、一年間ディリトリシアに滞在することになりますわ。あまり大人数で行つても目立ちますから、貴方達一人にだけついてきて貰いますわよ。もちろん、異論は認めませんわ！」

……こりして。

傍観者でいたかったのにも関わらず、私達は当然のようになに巻き込まれたのだった。

王女の暴走に、そして『祭典計画』に。

砂漠の王女の好奇心は、止まらないことを知らぬかのよひに（後書き）

作者：高良あくあ

輝く星たちは、飛ぶよつて過ぐる月中でせわしなく走る

「聖女ってどんな人だらうなーー楽しみだなーー！」

生贊が来る一時間前、王宮の廊下を二口二口しながら歩く少年がいた。

期待に胸膨らませ、キラキラと光る金の瞳。少し癖のある銀色の髪。まだぶかぶかの軍の制服や腰に吊つた短剣はまるで兵隊『』っこをしている子供に見える。が、この少年もれつとしの王國軍の一員である。

実年齢十三歳、見た目だけだとさらに幼く見える少年はテオといい、ある事情でレオンハルトが軍に口添えし、最年少で軍に入った少年だった。

だが、若く純粋すぎるこの少年は祭典が始まる際、三大將軍の悩みの種となつた。

問題は、この純粋すぎる少年が生贊をだますことができるかどうか、だった。

純粋であるがゆえに正義感も強いこの少年は、「だますなんてひどいよ！」といつて生贊に真実を教える可能性もある。

うまく説得できたとしても生贊に何も悟られずに一年間過ごせるほどポーカーフェイスの備わつた人間でもない。

ここでおまじめなアルトウールが困つていると、ホラントがひとつ案を出した。

「テオに生贊が本当の聖女だと信じさせ、生贊の周りに配置して『あなたは聖女だ』と言わせ続ける」といつものだ。

こうすればテオに本当のこと伝える必要もなく、生贊にも『自分が聖女だ』と認識させることができる。

こうして、テオは王国では初の事情を知らない兵隊となつたのであつた。

そんなテオは今、レオンハルトの命令で鳥使いを呼びに行つていた。兵舎の奥にある高い塔。そこが王宮で使われる伝書用の小鳥の住処で、テオのめあてである王宮でたつた一人の鳥使いのいる場所だつた。

「モニカ～。いる？」

声をかけてから返事を待たずに塔の扉を開ける。返事を待つても無駄だからだ。

扉の向こうには少女が立っていた。塔の窓から差し込む光を受けて輝く銀の髪、優しい光を持つ金の瞳。鳥たちに囲まれてたつている少女はテオより三歳上で、その美しさから彼女も聖女なのではないかと考えてしまう。

少女はテオに気付くとこりと笑つた。

「モニカ、レオンハルト将軍が聖女の歓迎に鳥を連れてきてくれつて」

テオの言葉にモニカはうなずく。

モニカはこの国でたつた一人の鳥使いで、テオの姉でもあった。もともときこりの家に生まれた一人はティザン山脈のふもとの村で暮らしていた。

だが、モニカが12歳、テオが10歳のときに両親が魔物に襲われ両親は死亡、モニカはショックで話すことができなくなつてしまつた。

子供一人では働くのも難しいし、おまけに一人は深い心の傷を負つている。親戚もいない彼らは本当に困つてしまつた。

そんな時、同じ村出身でテオとよく遊んでやつていたレオンハルトがその話を聞き、やんちゃでかなりの剣の腕前のテオを軍に入れることができないかと前将軍と交渉し、軍に入れた。その後、心の傷を負つたモニカをどうにか癒すことはできないか考え、鳥使いの仕事を彼女に進めた。

そんなレオンハルトの気遣いのおかげでモニカも笑顔を取り戻し、2人は幸せに暮らしている。

「ねえねえ、聖女ってどんな人なのかな。楽しみだよね~。きっと綺麗なんだろな、モニカみたいに」

そんなテオの言葉にモニカは苦笑する。

モニカの肩に止まつた小鳥が楽しそうにチチチと鳴く。

「あ、お前今俺を笑つたんじゃないだろ? むう……」

小鳥をにらみつけると小鳥はまるで人の言葉を理解しているようにさらに楽しそうに鳴く。

モニカはそんな一人と一匹を見ながら手元の紙にペンを走らせる。
『今日は忙しいんじゃなかつたの? あと一時間で生贊が来るんでしょ?』

「あ、そうだつた。急いで着替えてこなくちゃ。じゃあレオンハルト将軍によろしく!」

そう言つうとテオは風のように廊下を走つていいく。

(……もう少し落ち着くようになつて言つべきかしら)

モニカが考えると肩の小鳥もちょっと首をかしげる。

(……まあ、いいか)

小鳥がせかすように方を離れ、生贊の歓迎に向けてせわしなく人々の動き回つている大広間に向かつ。

モニカもその後を追つて走り出した。

モニカが大広間に向かつている頃、その大広間ではちょっとした騒ぎが起きていた。

「生贊は女の子なんでしょう? なら絶対お菓子の家で歓迎するべきよ! 女の子はお菓子が好きなのよ!」

「それはお前の好みだろ? 生贊は日本人だというし、やはつっこは我ら『忍術研究部』の連續木の葉がくれの術で……」

「木の葉がくれの術なんて綺麗じやないわ！中世ヨーロッパ風の広間で木の葉がくれの術なんて似合わないわ！」

「ならお菓子の家はいいのか！？まったくお前は日本人の癖に魔女なんかに飲み込まれやがって」

「魔女をバカにしないでよ！時代は魔女つ子ブームよ！！！」

「いやいや、今は忍者の時代だ！魔女なんて日本の恥だ！」

と、謎の言い争いをしているのは王宮の魔術師たち。中の『魔女同好会』代表日本人トリッパー 麻耶と、『忍術研究部』代表日本人トリッパー 陽助だった。

この二つの集団は主に現代日本人の『オタク』を中心となつた集まりで、現代ではできなかつた魔法が使えるようになつたので魔女つ子をやつてみたりだと魔法を進化させて忍術に改造してみたりだとか、そんなことをやつてている。

このメンバーである魔術師たちが演出について言い争つているのだ。

「お菓子の家よ！」

「木の葉がくれの術だ！」

「つるさああああああああい…………お前ら少し黙れ！！！」

その怒鳴り声で騒いでいた人々が口を閉じる。

怒鳴つた本人、アルトウールは泣く子も黙る邪眼で周りの人間にらみつける。

「いいか!? 生贊がこの世界に来るまであと一時間を持つてる！つまりここに来るまではあと三・四時間しかないんだ！言い争つている暇などない！木の葉がくれの術もお菓子の家も却下だ！」

「えええ！？そんなん～」

数人が反論しようとしたがアルトウールにらまれて静かになる。

「よく考えろ！大体の演出はすでに決まつていて！いまさら変える時間はない！」「チャゴチャ言わずにちやつちやと準備しろ……」

ここまで言うと魔術師たちはしぶしぶ準備のために散つていく。

「まったく……」

「大変そうだな、アルトウール将軍」

アルトウールの背後から声がかかる。すばやく振り返つてアルトウールは反射的に跪いてしまつた。

「アルフレート様！」

反射的に動くアルトウールの姿に苦笑しながらアルトウールに声をかける。

「おいおい、堅苦しいから立つてくれないか？」

「ですが……」

「いいから。祭りの間は堅苦しいのは無しだ」

ニコニコとそういうアルフレートにアルトウールは内心ため息をつく。

（さすが祭り好き民族……）

少し迷いながら立ち上がり、アルフレートに聞く。

「アルフレート様、なぜここにいるのですか？」

「ああ、聖女の歓迎に参加するからだよ？あと、聖女はもうこっちに来たつて連絡が入つた。時間差があるからもう移動を始めてるだろうな」

「もう来たんですか。はあ……」

予想以上に早い。移動もできるだけ早い手段を使うといつていたからあまり時間がない。

「アルトウール、アルフレート様。楽団のほうは準備できました」

「了解」

ホラントも準備を終えてやつてくる。

「アルフレート様はどのよくな役をやることになつてるんですか？」

「美しき聖女を歓迎する国代表の王子。いやー、楽しみだね！」

「そうですね……いよいよ祭典が始まるんですね……」

しみじみと、かつ楽しそうにホラントとアルフレートが話す。

「まだ実感がわからないなあ……」

ホラントがそう言つといつ来たのかレオンハルトが言つ。

「実感がわく情報があるんだけどさ、聞く？」

「なんだ？」

「……言いたくないんだけじゃ、生贊が来るまであと三十分になつた」

「「「はあー?」」」

その言葉が聞こえた人間全員が一齊にレオンハルトを見る。「なんか、テレポートでつれてくることになつたんだと。だからまじめに時間がない」

「なんだと!?」

「今は神係たちがうそ吹き込んで時間を稼いでる」

「これは……ヤバイかな?」

「やばいかな? ジャなくてやばいんです。ものす"J"くやばいんです」そう言いつとレオンハルトはすうっと息を吸い、できるだけ大声で言う。

「生贊が来るまであと三十分だ!! 最高スピードで仕事をやれ!!」こうして、生贊は本当にせわしなく準備を進めることとなつたのだった。

輝く星たちは、飛ぶよひに過ぎぬ中のせわしなく走る（後書き）

作者：柳リョウ

歪められた過去とここにある未来を、私は正しき道へと導く

普段は分厚い雲に覆われて居ることが多いディリトリシア王国も、その日はめずらしく雲ひとつなく晴れ渡っていた。國中の人々は、祭典が始まるに相応しい日だと、よりいっそう興奮し、歡喜していた。その気持ちは、王宮に住まう者とて同じであった。

ディリトリシア王宮は、四百年前に渡来したリーゼンフォード一族により建立された、バロック様式にも似た造りの壯麗な宮殿であった。彫刻が施された王宮内には、通常、いたるところに従者が控えているのだが、今日という日は皆、聖女が住む事になる離宮に移動しているため、数える程度しか残つていなかつた。

そんな中。

「姉上、待つて。どこへ行くの？」

変声期前特有の、まだあどけなさが残る声。

真昼の太陽に照らし出されたステンドグラスを全身に浴びながら、少年はぐいぐいと少女に手を引かれ、おぼつかない足どりで歩いていた。母親譲りの見事な髪、プラチナ・ブロンド。原色の光を纏つてもあつてもなお、その輝きを保つていた。

感嘆に値するこの髪の持ち主は、名をアビゲイルといった。ディリトリシア王国の第三王子だ。そして彼の手を引くのは、一つ年上の第一王女、アリストシア。彼女の髪は父王に似て、豊かな栗毛であつた。それはいくつもの三つ編みにより計算されつくして束ねられ、頭上で豪奢な銀細工とともに結わえられている。

二人は普段、付き人なしでは王宮内さえ自由に出歩くことはできないのだが、今日という日は特別だった。彼らに付き従う余裕のある者は、誰もいないのだ。

「アビィ、遅い。もつと早く歩いてよ。急がないと始まっちゃうよ」

アビィとは、アビゲイル王子の愛称。身内ののみで使われている。

「姉上、始まっちゃうって？ ま、まさかアレじゃないよね」

「まさかもなにも、アレしかないでしょ。私ね、今日をすこしく

く待ちわびていたの。退屈なのはもううんざり」

アリストシアは桃色の唇をペロリとなめて、いたずらに田を細めた。それを見て、アビィは不安げに苦い顔をした。

「私はこの田で祭典の一部始終を見てやるの」

「祭典に行くの！？」

「当然。参加しなきゃ損だもん。楽しなだもの勝ち。それにね、理由はわからないけど、あの三大將軍が全員若手に代わったらしいし、兵は朝から大忙しだし、こここの警備は甘いはずだわ。外へ出るなんて簡単よ」

「そんな。父上や母上は外へ出でては行けないって。だから……」

「アビィは祭典を見たくないの？」

「見たいけど……でも、外へ出でてはだめだから……」

「アビィは良い子ちゃんね」

アリストシアはアビィの艶やかな髪を指でぐるぐると絡めとつた。そして二タリと怪しく笑う。「だけどね、たとえ外へ出でちゃだめだとしても、アンタも私と一緒に行くのよ」

アビィは一瞬にして顔を強張らせた。

「ええっ、僕も？」

「あたりまえでしょ。レディを一人にしちゃダメなんだから。何としてでも一緒に連れて行くわ」

「だ、だめだよ！」

アビィは手を引くアリストシアを振りほどいてした。が、出来なかつた。そればかりか、アリストシアはどんどん前へと進んで行く。不敵に笑いながら。

「ばかね、だめでも行くの」

「絶対にだめ！」

アビィは両方の膝をピンと伸ばし、踵に力を入れた。同時に、レスの縁飾りが付いたじょ「い」型のブーツは、キュー キュー キューと大きく音を立てる。必死に抗おうとした。

これにはさすがにアリストシアも止まるしかなく、

「何よ」

鼻で短く息を吐くと、負けじと踏み出す足に力を入れた。一步、また一步。

「ううう」アビィは健闘むなしくあるが、引きずられた。「あ、姉上、やめて」

「やめるわけないでしょ」

アビィの重みなどものとはせずに、アリストシアはどんどん進む。とうとう根負けし、アビィは「もう」「と情けない声を上げた。「だめだよ姉上。僕らは父上や母上に祭典の参加を禁じられてる」「子どもだからってやつね。でもそんな理由、納得できない。父上も母上も過保護すぎるのよ。アンタもそう思わない?」

「でも」

「だいたい不公平なのよ。兄上たちも参加するんだから、私たちにも権利はあるはず」

「でも」

「なんで私とアンタだけが参加しちゃいけないの? おかしいわよ」「でも……僕たちにはまだ早いって……」

「もうう、でもでもうるわいわね!」

アリストシアは不機嫌に眉を吊り上げた。

「なによ、いくじなし。アビゲイルなんて勇ましい名前なぐせに!」「こには勇気を見せるべきよ!」

意味がわからず、アビィは首をかしげた。「僕、好きで勇ましい名前になつたわけじゃ……」

「アビィは名前負けしてるのよ。すうへく負けまくつてる。だからこれからはちゃんと名前どおりに勇ましくならな」と

「え……」

「だいたいそんな真面目な良い子ちゃんだから、いまだにガールフレンドが一人もいないのよ。兄上を見習いなさいよ」
ここでの兄上とは、第一王子のことを指す。父王に似たのか、無類の女好きだ。数が把握しきれないほど、たくさんガールフレンドがいる。

「男は女にモテてこそ価値があるの。技量が試されるの。やう兄上も言つていたわ」

「そんな……」

しかし、アビィはまだ十歳。女の子には全くといっていいほど興味がない。

「僕、ガールフレンドなんかいらないよ

「ふうん、そうなの」

アリストシアはアビィに流し田をし、妙に納得したように頷いた。そしてゆっくりと腕を組む。

「やっぱり思つっていたとおり草食男子なんだ。軟弱なんだ。男の子は普通、女の子の事ばかり考えてるものなのに」

「女の子の事なんか考えないよ。絶対、僕が普通だよ

「ううん。異常よ」

「ちがうよ、普通だよ」

「じゃあ、百歩譲つて普通としましょ。……だつたらアビィは、普段女の子のことじやなくて、何を考えてるのよ

アビィはしばらく考えて、答えた。

「……僕はおもに、絵のこととか、かなあ

「絵？」アリストシアは鼻を鳴らした。「そつ、だからいつも絵を書いてるのね。好きなのね」

「うん。好きかもしない

「あのわけ分かんない絵が、ねえ」

「そんなことない、わけ分かんなんかないよ

「どう見てもわけ分かんないじやないの。そう言つながら、今朝描いたアレは何なの？」

絵。アビイは日々、従者に紙をこつそりと用意させ、思つま
まに絵を描いている。ある時はカラーだつたり、ある時はモノクロ
だつたり。しかし描かれるものは、毎度、アリストシアにとつて目
にした事がないものばかりで、彼女としては不気味としか思えなか
つた。ちなみに今朝描かれたのは、得体の知れない大きな建造物。
それが何であるかは、描いた本人、アビゲイルだつて知らない。

もっとも、聖女・遠藤里奈は知つているだろう。なぜならそ
れは、日本でも有名人、東京タワーなのだから。

「わかんないよ」アビイはうつむき、もじもじしながら小さく言つ
た。「何を描いたかわからんない」

「あのさ、それってさ、わけ分かんない絵つて事だよ」

アリストシアは膝を折り、アビイの目線に目を合わせた。

「あのね、私、思うんだけど。アンタがわけ分かんない絵ばっかり
描くのはね、どこかで現実逃避してるからなんじゃないかしら。現
実逃避してるから、空想上のものばかり描いてしまつのよ。だから
草食男子になっちゃうの」

「そんな……僕、現実逃避してないよ」

「だからこれから外へ出て、現実と向き合つ必要があるのよ」

「だから僕、現実逃避なんかしてないって」

「そうと決まれば急がなくちゃね。現実を知るためにも、まずは『
聖女』が来る瞬間をこの目で見なくては。逃しちゃ損だもん」

「え? ……姉上、僕の話、聞いてる?」

アリストシアはひょいと幾重にも重なつたシフォンドレスを右手
でたくし上げると、赤い絨毯の上を軽やかに駆け出した。左手には
アビイの腕。

「わ、ちょっと、ちょっと、姉上!」

聖女が現れるとそれでいる森には、現在多くの者が集まつていた。

祭典計画実行委員会聖女擁立担当部署の者たち。そして、どこからともなく駆けつけた野次馬たち。

彼らから離れる事約十メートル、息を切らせながらアリストシアとアビィはいた。二人は思いのほか疲れきっている。なぜなら当初の予想をはるかに超えて、王宮から抜け出すのに手間取つたからだ。兵士の目をこまかすのは簡単でも、新しく就任した三大將軍はそうはいかなかつた。

「それにしてもあの將軍たちつて、背中に目でもあるんじゃないかな？ 絶妙なタイミングで振り向くんだから。慣れない魔法を使つちゃつて、もうくたくただわ」

おでこにはらりと落ちる前髪を横に撫で付けながら、アリストシアは言つた。

それを聞き、アビィは彼女に耳打ちをする。

「將軍に選ばれたトゥールとホラントとレオンハルトつて、すごく優秀らしいよ。『選ばれるべくして選ばれた』って前にアルフレード兄様が言つてた」

「そうなの？ もう、そういうのは早く言いなさいよね。それならもつといろいろと準備できたのに」

「知らないよ。だって僕、外へ出るなんて思つてなかつたもん」「なによ生意氣」

言葉を続けようとして、アリストシアは人の気配を察知した。

「誰か来るわ。隠れるわよ！」

アリストシアはアビィの腕を掴むと、すかさず岩陰に隠れた。

「ここに間違はないのか？」

黒いマントをすっぽりと被つた男が、身を低くして歩きながら、隣の同じく黒いマントを着込んだ女に言つた。一人の顔は黒い布で覆われ、見えるのは目元のみ。

「はい、確かです。ご覧下さい、あちらにライナー・リーゼンフォードがいます。それに、セイルディート・リーゼンフォードの姿も黒い男は舌打ちをした。」忌々しいリーゼンフォード一族の者か

「はい。ですから」^ヒに『聖女』が現れるのは確実かと

「ククク」

男は肩を震わせて笑った。

「歪められようとしている未来を、我は正しき道へと導く」

黒い女は、左右を見渡すと、男に向かい、敬意を込めて礼をした。

「これからいかがいたしましょう。思った以上に人が多いですが……」

「今実行するわけではない。今は聖女を一眼覗るのが目的」

男は女のあごを指でクイと持ち上げると、顔をすいと近づけた。

「ベアトリス、しっかりと聖女を見ておけ。その姿を覚えておけ。我は他にやることがある」

「他に、ですか？」

問には答えず、男はするつと立ち上がり、足音を立てずにゆっくりと歩き始めた。その方向は、アリスタシアとアビゲイルの方に向だ。

アリスタシアは「ぐりと生睡を飲んだ。

「ま、まずいわアビィ。変な奴がこっちに来る……」

「ど、どっしょう姉上」

「どっしょうもなにも、魔法を使う時間もないし……」^ヒは大きな声を出すしかない。きっとだれかが助けてくれるわ

「でも姉上、王宮を出たのが巴しゃつたら……父上や母上に怒ら
れちゃう」

「ば、ばか。こんな非常時に」

ひそひそとやり取りをしている間に、黒いマントの男は、岩陰に潜む小さな一人を覗き込んでいた。

「あ……」

黒い布から垣間見える大きな田は、^ヒと細められている。

「これはこれはディリトリシアの第一王女と第三王子。このような所で何をなさつてるのでしょ？」

あまりの男の威圧感に、二人は萎縮してしまった。何も答えられ

ない。

男は続ける。

「もつとも、私は未来視でして、あなた方がここへ来られる事を知つていたのですけれど」

アリストシアは目を見開いた。

「聖女というものは、興味が尽きないものですねえ」

男は肩を震わせ、笑う。「ククク」

「な、何者なのです」

両手でアビィを守りながら、おそるおそるアリストシアは問うた。

「それは後ほど説明しましょう」

「後ほど? どういうことです」

「聰明なあなたは分かつていらっしゃる筈。……お連れしましょう、我が城へ」

二人の小さな体は震え始めた。

「姉上……どうじょう」「う」

アリストシアはアビィの顔を見ると、軽く頷いた。そして、ずいと男の前へと進み出ると、背筋を伸ばして言った。

「私があなたの城へ行きましょう。ですが、弟だけは……お願ひします」

黒い男の目はさりに細められた。

「立派です。貴女の勇気に讃えて、受け入れましょう」

『誰めりやむつといひてこぬ未来を、我は正しき道へと導く』（後書き）

作者：ロード

彼女のためだけに動く彼は、穏やかさと激しさを併せ持つ人だった

リーゼンフォード一族の人間の魔法　『テレポート』によつて

『生贊』が王宮に到着したのと時を同じくして。

ディリトリシア王国の領内にある大平原で、一人の青年が全身を黒い衣装で包み込んだ男と対峙していた。

「僕の名前はルアルド・リーゼンフォード。元いた世界ではルアルド・デベロップという名前だつたのだが、まあ、それはどうでもいいか。

ディリトリシア王国の軍に籍を置く一兵士であり、年齢は童顔のせいで十代後半にも見えるが、これでも二十二歳。好きな色は黒。だからというわけではないけど、黒のローブに黒いズボン、おまけに長い黒マントと、もう黒一色の格好をしている。そのためか、生まれ持つた金色の髪と緑色の瞳がとにかく目立つ。そりやもう目立つ。闇に隠れての不意打ちは絶対にできないんじゃないかな、といふくらいに目立つ。

あ、そうそう田に入ると鬱陶しいから、髪は短く切り揃えてあり

「

「いい加減にしないか！」

「いい加減にしないか！」

対峙している黒ずくめと そして、なんとアリストシアさまからも怒鳴られてしまい、僕は思わず口をつぐんだ。むう、前口上くらい聞いてくれたつていいと思つただけれど。

「やれやれ、アリストシアさまはともかく、あんたのほうも意外と余裕ないなあ、と言つてルアルドは肩をすくめてみせた」

「やがましい！」

「氣の短い奴だ。まあ、僕のボケに突っ込んでくれるのはありがたいけど。……よし、せつかくだからもう少し続けてみよう。敵なのにここまで全力で突っ込んでくれる奴つて、貴重だし。」

「ふむ。『ボケとツッ』『ミの』『刀流』の称号を持つルアルドは肩をすくめてみせた、のほづがよかつたか？ とルアルドは黒ずくめの男に問い合わせてみた。」

「その我をおちよぐるセリフをやめろと言つている！」

「とこいつか、いまがどんな状況かわかつてるんですか、あなた！」

「いまがどんな状況か？ そんなの、もちろん理解してないわけがない。どこからか取り出した短剣を黒ずくめが構えている。しかもその切つ先が突きつけられているのは、姫の首筋。つまりは、切羽詰まっているのだ、マジで。」

「でもアリストシアさま、僕のお氣楽な性格も、理解されてはいませんよね？」

「それは知っていますが、時と場合とこいつもも考えてください！」

お願いですから、もう少し緊張感を　」

「しかし、姫。ここまでやり取りで少しほは解けたでしょ」「緊張」「こいつと微笑んで言ひ。そつ、僕は別にただ趣味で黒ずくめをおちよくなっていたわけじゃない。そりやハ割方は趣味だつたけれど、残りの一割には姫の緊張を解く意味もあつたのだ。大体、身体が完全に強張つていては、この膠着状態をどうにかきたどりで、走つて逃げることも敵わなかつただろう。

「言られてアリストシアさまも「あ……！」とよけやくそれに気がつく、

「……つて、いえいえいえ！　それ、失敗したらどうするんですか！　激昂したこの男が私を殺そうとしたら、どうするつもりなんですか！」

「う、痛い」というを突かれた。

「あー、まあ、そこはそれ……」

ついでに言葉に詰まる。……ああ、うん、もしかつねでいたらアウトだつたな。危ない危ない。

僕は腰に提げてある長剣に右手を伸ばしながら、もう片方の手で短い金属製の杖を構えた。それから長剣で地面にぐぐつと円を描きながら言葉を投げつける。

「わい、じゃあここからほんと真面目にこいつか」

闘氣を放つ」と黒ずくめを威圧。彼の腕の中にいる姫が鋭く息

を呑む。……あれ、黒ずくめは？

「なかなかの殺氣だ。だが、足りんな。我にプレッシャーをかけるには」

あ、駄目なんだ。元の世界にいたときには、これだけで大概の敵の動きは封じられたんだけどな。まあ、そんなことをぼやいても仕方ないので、訂正のために一言だけ口にしておく。

「『殺氣』じゃなくて、『鬪氣』な」

剣を構えているが、僕の信念は『不殺』。殺す意思がないのだから『殺氣』なんて放てるわけがない。

それはそれとして、あれで動きを止められないと、一体どうしたものか。姫を人質にとられているから下手なことはできないし、もちろん魔法を叩き込むわけにもいかない。

……ああもう！ 僕が元いた世界でなら、やりようはいくらでもあるんだけどなあ！ いや、それどころか人質にとられているのが一般市民とかだったら、殺さない程度の威力の魔法で人質ごと一緒に吹っ飛ばすのもアリっちゃあアリなんだけどなあ！

……いや、やっぱりナシか。そんなことをしたらカナデが悲しむ。

『祭典計画』。

僕の婚約者であるカナデは、その計画の元となる案を出した人間だ。ただし発案したのは軽い気持ちで、だつたといつ。おそらく通りはしないだろう、という考えが頭のどこかにあつたんだそうだ。

だからこそ、彼女はいま悩んでいる。もし自分の案のせいが多くの人人が傷つくことがあつたらどうしよう、と。

活発で、ともすれば他人に迷惑をかけることが多いカナデだが、最初からそれを望んで行動しているわけじゃない。自分のしでかしたことには必要以上の責任を感じて傷ついてしまう、そんな纖細で責任感のある一面だって確かに存在するのだ。

僕は、そんな彼女を守りたいと思う。彼女を傷つけようとする、あらゆるものから。『祭典計画』の最中に人死にが出るのが駄目だつていうのなら、他でもないカナデのためだ、そうならないよう、できる限りのことをやってやる。

元の世界にいた頃は、職業柄、誰かのためになんて動こうとも思わなかつた僕だけれど。

『黒き魂』という謎に包まれた『力』を生まれつき持つていたこともあって、自分のことしか考えられなかつた僕だけれど。

そんな僕を、彼女は受け入れてくれたから。

人を愛するつてことの貴さを、カナデは僕に教えてくれたから。

.....。

.....しうがない。奥の手を、使うとするか。

田を閉じて、すう、と深呼吸をひとつ。そして『自分の内側』に意識を向ける。

使つのは、ほんの一瞬だからな。頼むから見逃してくれよ？

瞳を見開き、口の中で呟く。

「
殲滅対象認定」

瞬間、破壊衝動の塊である『黒き魂』が僕の心を呑み込み始め
「ふつ！」

まず、素早いスライディングで黒ずくめの右足を払った。同時、腹筋の要領で身体を一息に起こし、杖を握りしめた左拳で「おらあっ！」とアッパー・カット。左の拳は倒れゆく男の右手に当たり、見事、短剣を弾き飛ばすのに成功する。続いて俺は左拳を腰だめに構え、左のストレートを叩き込

そこで動きを止め、ぎりっと歯噛みする。それから『黒き魂』から生じる破壊衝動を抑え込もうと、俺は瞳をギュッと閉じた。

壊したい。目の前の男を。

壊したい。黒ずくめが体勢を崩した瞬間、転がるように走りだして男と距離をとった姫を。

壊したい。この場に存在する、なにもかもを……！

そんな欲求をなんとか抑え、僕はいつもどおりの精神状態に戻る。……まったく、『黒き魂』の『力』を使っている間は痛みを感じないから、身体が悲鳴を上げるような動きもできるといつ利点はあるけれど、理性が飛びそうになるデメリットはどうにかならないものだろうか。おまけに言葉遣いだって荒々しくなるし、一人称だつて『僕』から『俺』に変わっちゃうしさ。

それはさておき、意識して軽い口調を作り、田の前の男に僕は告げる。

「そ、これでようやく対等な条件になつたな。まだやるか？ クロスケ」

「……誰がクロスケだ」

男の言葉には静かな怒りが込められていた。しかし『黒き魂』の『力』を使ったあとはおちやらけていなければやってられないのも事実。なのでちょっとばかり悪いとは思いながらも、馬鹿にするような態度で目の前の敵に対する。

「気に入らなかつたか？ カナデがつけそうなあだ名で呼んでみたんだけど。なら、そうだな……。まつくるくろすけ、とかは？」

「却下だ」

「むひ、これも駄目か……。じゃあいいよ、クロちゃんにしよう、クロちゃんに！」

と、僕のそのセリフにアリストシアさまが反応した。

「なに精一杯の妥協をしました、みたいな言い方をしているのです！ そんな呼ばれ方、誰だって嫌に決まっているでしょうー！」

うん、とりあえず横から茶々を入れられるくらいには、心に余裕が戻ってきたようだ。よきかなよきかな。

「そつは言われましてもアリストシアさま。僕はこいつの名前、知

らないんで。姫は『存じで?』

「ハ……」

あ、アリストシアさまが詰まつた。してみると彼女もこここの名前は知らないのか。ここで黒ずくめの男が迂闊にも名乗つてくれた助かるんだけどな。

「……やつこえば、まだ聞いていなかつたな。なぜ我の前に立ちはだかることができた?」

「へん、やつぱりここつ、そういう迂闊者じやないな。ツツコミはしてくれるんだけど、決定的な情報は絶対に漏らしてくれない。

……。

まあ。

いいんだけどな。

うつせいま、僕がここに捕まえつけられたから。

先ほど描いた円の中央に戻りながら、僕は彼の間に答えてやる。

「ああ、それは僕も未来視が使えるからだよ。それで視たんだ、さらわれたアリストシアさまがここを通る未来を。

そうだ、ここでひとつ、豆知識を披露してやろう。この未来視は生まれ持つたものじゃなく、当時、修得したてだったく万理断章カツア・アーケを使って、この世界に渡来してしまつたときに得た能力なんだ。ほら、あれだ、『渡来特典能力』ってやつ

ガリガリと右足を地面にこすりつけながら続ける。

「どうでもいいことだつたか？ ともあれ、お互い未来視が使えるとなると、その『精度』と『どれくらい先まで見通せるか』が勝負を決することになるわけだけど、あんたには自分が負けるってところまで観えているのか？ ちなみに僕には、僕が勝利する場面がちゃんと観えてるぞ」

嘘だつた。いわゆるハッタリというやつだ。僕の未来視では、そう先のことまで見通すことはできないのだから。とりあえずいま観えているのは、これからこの男と魔法の撃ち合いになることくらいだ。

おまけに、僕の未来視は五割程度の確率でしか当たらない。そんなだから、兵士を大勢連れてくるってこともできなかつた。そういう精度が低いっていうのは、もしかしたら生まれつきのものではなく『渡来特典能力』だから、なのかもしない。

しかし、そんなことは絶対に口には出さない僕。だつて、そうだろ？ 自分の能力の欠点を晒すことに、一体なんの意味がある？

黒ずくめの男は、少し沈黙してから絞り出すような声で、

「……未来は変わる。我的行動で、いくらでもな」

そう返してきたか。しかし、その返答はとりもなおさず、奴が『自分が勝利する』という未来を観れていないことを意味する。自分が敗北する未来が観えたのか、自分の意思で未来が観ることができないだけなのかは不明だが、いまは奴が自分の勝利を観れなかつたことがわかつただけで充分だ。

足をひきすり、地面にある円の中に、爪先でガリッと最後の線を刻み込む。僕はニッと笑い、

「そうか。なら　変えてみな！」

左手に持った杖の先端を黒ずくめに突きつけた。そして素早く呪文を詠唱、自分を包む逆五芒星の魔法陣が輝きを放つのを見届けてから、

「フレア・ショット
火炎弾！」

赤みがかつた光球を放つ！

対する黒ずくめの男は必要最小限の動きでそれから身をかわしてみせる。彼の後ろのほうで響く爆音。

僕は、元いた世界では、『専門家』やら『大賢者』やら『黒の魔道士』やらと呼ばれていたほどの呪文の使い手だ。剣や拳、脚を使つた技と魔法を組み合わせて攻撃するなら、まさに敵なしと謳われていた。僕の存在を脅かすものなんて、僕の内側にある、隙あらば僕を呑み込もうとする『力』　『黒き魂』くらいのものだった。

ただし、それはあくまで僕の元いた世界では、の話。この世界では『世界の意思』　ラグナーシャによつて僕の魔力はかなり制限されており、魔法 자체も神や魔族の力を借りたものや強力なものは、唱えてもまったく発動しない。

これは、なんだかんだいつて魔法に頼つて戦術を組み立ててきた僕にとっては大きな痛手だつた。そりや剣も体術も人並み以上には使えるけれど、やっぱり僕の一番の得意分野は魔法だつたから。

それに、魔法を使うためには『力在る言葉』の他に『杖』を始めとした、『力を管理し行使し調整する媒体』と『魔法陣』が必要という、この世界の『法則』も僕の枷になつていて。僕の世界では呪文の詠唱と『力在る言葉』を口にするだけで術を使うことができたからだ。まあ、『魔法陣』の枷は、実はカナデのおかげで外すのに成功したのだけれど。

さて、奴は木製の杖こそ取り出しだが、まだ魔法陣の準備を調えていない。いまのうちに魔法を連発して優位に立つておくとしよう。そう考え、次の呪文の詠唱に入ると同時に

「エクスプロード！」

「なっ！？」

水に飛び込むような動きで地に倒れ込む僕。急ぎ地面を転がってその場から離れる。刹那の間を置いて、僕の立っていたところで大爆発が起こった。

び、びびった……！

判断を間違えていれば、いまので殺されていたんじゃないだろうか。

それにしても解せない。詠唱は小声でしていたのだろうけど、魔法陣なしでどうやって魔法を発動させた？

考え込む僕の脳裏に、ふとカナデとのやり取りがよみがえった。それは、僕がこの世界に来てから一月ばかりが過ぎた頃のもの。

『ふ～ん、つまり、魔法陣なしで魔法を使いたいんだ？　でもさ、それは難しい相談だよ』

『やつぱり、無理なのか……？』

『や、そんな肩を落とさないでよ～。う、う～ん……。じゃあさじやあわ、わたしが考てる方法、試してみる？　成功は保証しないけど』

『……実験台になれってことか？　僕に』

『ひ、平たく言えば、そつなるかな。魔法が暴発しちゃう可能性もあるじ……』

『……マジか。それでもまあ、乗つてやるよ。いまのままじや不便で仕方ないし』

『おお！　生命の保証できないのに、それでもせつてくれるんだ！　度胸あるね！　それでこそ男の子だ！』

『ちよつと待て！　生命的の保証もないのか！？』

『あははっ、それは言葉のアヤだよ、さすがに。とにかく、お姉さんにするべて任せなさい！』

『不安だ。なんかす～い不安だ……。僕、とんでもない奴に救われちやつたんじゃあ……？』

もしかして、あのとき力ナデと僕が試した『あらわす』をあいつ

も使つてこらのか？ だとしたら身体のどこかに必ず『あれ』があるはず……。

注意深く、観察するように男を見る。……どこだ？ どこにある？この世界で魔法を使うためには、杖と魔法陣が絶対必要。それを欠かせば魔法は発動しない。つまり『あの方』は魔法陣を使わなくていい方法なのではなく

「 あつた！」

広げた黒ずくめの左の掌。正確には、その手袋の掌部分。

そこに、淡く光を放つ、小さな魔法陣があつた。描かれているのは破邪を表す五芒星^{グローブ}ではなく、不均衡を意味する逆五芒星。僕が攻撃魔法を使うときに用いている魔法陣だ。そしてこれは僕の推測に過ぎないけれど、彼の右の掌には、僕が回復や援護の呪文を使う際に使用している、均衡を司る六芒星の魔法陣が描かれているんじゃないだろうか。

参つたな、これじゃ本当に条件は対等じゃないか。魔法陣が描かれている手袋を用いての戦闘スタイルは僕（正確にはリーゼンフォード一族）の専売特許だと思っていたのに。

僕は普段、手袋にある魔法陣と地面に描く魔法陣、その二つを同時に使って魔法の威力をアップさせていく。もちろん元いた世界で使っていたものの威力にはまるで届かないのだけれど、それでも少しはマシになるからだ。しかし、その方法も魔法陣が足元にはなければ使えない。

さて、どうする？

もう一度魔法陣を描くなんてのは論外だ。あれはさりげなく爪先で描いたからこそ描ききることができたのだから。いくら自分の身

体の一部が入る程度の小さな魔法陣でいいとはいっても、敵に注目された状態で描けるとは思えない。

なら、僕が元いた世界でやっていたように戦うしかないか。で、上手い具合に移動して、さつき描いた魔法陣のところに向かうとしよう。

方針を決め、僕は呪文の詠唱を

「死ぬ覚悟はできたか？　できたならば逝け。　サンダーストーム！」

弾かれるように駆け出す。バチバチと音を立て、数条の雷（いかずち）が大地に突き刺さる。

ちょ、ちょっと待てえっ！　あいつ、いま明らかに呪文の詠唱をしていなかつたぞ！　魔法陣を用いずに魔法を使える理由はわかつたけど、これは一体どういづ……！？

「ジャガーノート！」

背筋に悪寒が走り、急停止。刹那の間を置いて、目の前の地面がなにかに押し潰されたかのように陥没した。くそっ、いまのも詠唱なしか！　本当、どんな仕掛けがあるんだ、あいつの魔法。『力ある言葉』を口にしてからのタイムラグがあるからかわせないってことはないけど、僕が圧倒的不利に陥っていることに変わりはない……つと、よし、こっちの詠唱も終わった！

「黒妖崩滅波！」

「テンペスト！」

僕が黒い波動を放つのと、黒ずくめが『力ある言葉』を発するのとは同時だった。

黒ずくめは波動を間一髪という感じでかわし、僕もまた、間を置いて具現した、雨粒を含む嵐から身を遠ざける。

しかし、こっちが魔法を一回使うまでの間に、黒ずくめは大体、三回魔法を使ってくるのか。これだと近づくことすらままならないから、剣や蹴りで奴を牽制するのも難しいな。

そもそもこいつ、『詠唱の必要ない魔法』なんて便利なものが使えるのに、どうして国に仕えることを選ばずに姫をさらつたりしたんだ？ どうもそのあたりが繋がっている気がしてならない。

……ん？ 待てよ。でもこいつは無敵か？ 最強か？

これは奴が『来訪者』であることを前提とした推測だけど、奴に

欠点 制限を受けている部分はないのか？

はつきり言って、こいつの魔法はかなりの威力を持つている。その種類だつていまの戦いで見た限り、広範囲を攻撃するものから一点集中のタイプまで存在している。

奴の魔法が詠唱を必要としないのは、『そういう類の術式だから』としていいだろう。きっと、奴が元いた世界では、魔法を使うのに詠唱を用いる必要なんてなかつたんだ。

呪文の詠唱が不要で高威力、しかも種類も豊富。こいつが一流の魔法使いであることは認めよう。

でも、こいつにだつて欠点はちゃんと存在しているはず。たとえば……そう、『命中率』とか。

と、そこまで考えて、ピンときた。試してそれを口に出してみる。

「さてはお前、来訪者だろ？ それも、元いた世界ではもっと

強力な魔法を使え、しかも『力ある言葉』の発音から魔法の発動までのタイムラグが一切ない、優秀な魔法使いだつた。違うか？

そう、おそらくはその『タイムラグ』こそがあいつの欠点。制限を受けている部分。どんなに強力でも広範囲でも、多少のタイムラグがある以上、正面きつて当てるのはかなり難しくなるから。もちろん、相手が一般人ならそんなことはないだろう。でも僕のように戦うこと^{なりわい}を生業としている人間相手では、そのタイムラグが致命的なまでの欠点になるのだ。

「…………

黒ずくめは無言。僕はじりじりと足を動かしながら続ける。

「お前が来訪者だつていうのなら、いや、元いた世界に帰りたがっている来訪者だつていう推測が当たつているのなら、姫をさらつた理由もなんとなく見当がつくよ」

そこまで言つて口を開ざす。僕は自分の推測をべらべらとまくしゃたてるのがあまり好きじゃない。だつて、もし違つていたら恥ずかしいじゃないか。

でも、見当がついたのは本当だ。こいつはきっと、元の世界に戻るため、ラグナーシャに『不利益をもたらす存在』と認識されたかつたんだ。だから姫をさらつた。いや、もしかしたら『生贋』に手を出そうという考えも持つてゐるかもしれない。

でも、僕は知つてゐる。ラグナーシャというのは僕たちが思つている以上に懐の大きい存在だ。だつて、僕が『黒き魂』に『呑まれた』ときですら、僕を『不利益をもたらす存在』と認識しなかつたんだから。

呪文の詠唱をしつつ、じりじりと足を動かし続け、剣の届く範囲よりも少だけ遠いところまで奴に近づいた僕は、一足で間合いを詰め、牽制の意味で剣を振るつた。

しかし、これはかわされる。続いて放った蹴りも同じ。詠唱時間稼ぐための攻撃だから、かわされてもさして問題はないのだが、ここまで攻撃をかわしてみせる奴の身のこなしには正直、驚かされた。魔法使いにしては、かなり体術が使えるほうなんじゃないか？と、そんなことを思った次の瞬間。

「ぐつー？」

ドスッといづ音と共に、黒ずくめの蹴りが僕の腹にめり込んだ。

「ルアルドっ！」

叫ぶ姫の声が遠く聽こえる。僕は痛みをこらえきれずに地面へと転がった。当然、呪文の詠唱は中断せざるをえない。ケホケホと咳が口から何度も出た。

や、やばっ……！

恥ずかしい話だけれど、僕には痛みに対するこらえ性がなかつた。一発でもまともにもらえば、戦闘能力が激減してしまうのだ。こらえきれない痛みがあると精神を集中させることも難しくなるから、魔法も技も使えなくなつてしまつし。

これは、もう一度『黒き魂』の『力』を使ってなんとかするしかないか……？

さつきだつてそうだつたのだけど、この『力』は実を言うと、も

う絶対に使いたくはないものだつた。だつて、『以前使つたときは、たまたま大丈夫だつただけなのではないか』という疑念が拭いきれていないのでから。そう、今度こそ『力』の使用と同時に、この世界から弾かれてしまうかもしない。

この世界に来たばかりの頃ならいざ知らず、いまの僕はこの世界を去りたいとは思つていない。当たり前だろ？　ここには僕が大切に思う『婚約者』^{あいするひと}がいるのだから。

しかし、それでもここで黒ずくめに殺されれば、そのカナデとも一度と会えなくなつてしまふ。だつたら……。

そこまで考えたとき。僕の親友　コンといつねの青年が口にしていたことが思い出された。

『ボクたちはすぐ、それが当たり前のことに錯覚しちゃうけどさ。待つてくれる人がいるということ、出かけていった人が帰つてくれる」と、それって本当は涙が出つけやつくらい嬉しいことなんだよね。

お互いがそこにいる。存在することを許されている。それはさ、なんていうか、奇跡みたいなものだから

確かに、その通りだ。

そうだ。カナデが　待つてくれる人がいる限り、僕は何度でもリスクを負おう。ラグナーシャに拒絶され、別の世界に弾かれるかもしれないこの黒き力で、何度もその当たり前でちっぽけな、けれど彼女が望んでくれる奇跡を起こしてみせよう。

その決意を胸に、地に伏したまま、再び『自分の内側』に意識を向ける。そして黒ずくめを視界に收め、呟いた。

ルアルド・デベロップがこの世界にやつてきたのは約十ヶ月前、
カナデ・リーゼンフォードがやつてきたのは七年前　『祭典計画』
を発案したときから数えるなら六年前　のことだった。

「ナレッジアテック／万理断章へはちゃんと発動したよつだけ
ど……」

少し痛むのか、頭を押さえながら呟く彼に、短く切り揃えられて
いる茶色がかつた髪を揺らし、カナデは答える。

「ここにはディリトリシア王国だよ。正確にはその王都からちょっと離れた街道だけど」

「デイリトリシア王国…………。街道…………」

「うん、そう。で、きみは来訪者だと思ひ」

言つてカナデは愛らしい笑顔を見せた。それは十代後半の少女のそれを思わせる、無邪気かつ元気な笑顔。実年齢は二十二歳であるカナデの笑顔からそんな印象を受けてしまうのは、やはり彼女がかなりの童顔・低身長であるということに起因しているのだろう。

「来訪者……？」

「グルルウ……！」

訊き返すと同時、少し遠くから何者かの唸り声が聞こえてきた。ルアルドは眉をひそめ、カナデは少し身を強張らせて、その何者かを視界に收める。

それは一足歩行をするトカゲのような生物だった。背は平均的な成人男性のそれと同じくらいだろうか。身体の色は緑。戦う際に武器として用いるのか、両の手にある爪は鋭くとがっている。

「モンスター？ リザードマンか？」

「違う。グリーンドラゴンっていう魔物だよ……！」

呑気な咳くルアルド。額に汗を浮かべるカナデ。両者のリアクションはまったく正反対のものだった。

「逃げる算段を考えないと……。街に張つてある防壁魔法のおかげで、街に魔物が入り込むことはまずないから、街の中に飛び込めさえすればなんとか……！」

「ねえ、ちゃんと走れる？ 腰抜かしてない？」

気遣わしげな表情を見せる彼女に、ルアルドは微笑を返した。

「大丈夫。とにかく、あの魔物は倒しちゃってもいいんだよな？」

「え？ それはもちろん、倒せるならそのほうが助かるけど。あ、そういえば、口ぶりからして魔物を怖がってる感じしないね。」

もしかして、きみの元いた世界にも魔物がいたとか？」

「ああ。いたよ、しつかりと。でもってどんな奴も俺の敵じゃあなかった」

「おおっ！ それは安心！ 本当、すうじく助かるよ！」

パアツと表情を輝かせるカナデ。ルアルドはそれにかまわず、一人ごちる。

「それにしても、『元いた世界』か。どうやら『万理断章^{カーツア・アーク}』による世界移動は成功したみたいだな。戻つたらすぐにレポート書いて提出するか」

「あつ！ くるよー！」

「ほいほい。じゃあ、そつだな……」

素早く呪文を詠唱。それは彼が住んでいた世界の『魔王』の力を借りるためにのだつた。

『力ある言葉』を大声で叫んでグリーンドラゴンへと手をかざす。しかし、その掌から飛び出すものはなにもない。

「あれ……？」

「ど、どうしたの……？」

わざかに責ざめる一人。けれど顔を見合わせるなんて無駄な動きはすることなく、ルアルドは再び呪文の詠唱にとりかかった。

しかし、魔物が簡単に呪文を唱える時間を与えてくれるわけがな

い。グリーンドラゴンは爪を武器にルアルドへと突っ込んできた。

「あつ、危ない！」

悲鳴を上げるカナーテにルアルドは舌打ちひとつ。いつもよりも鈍く、重くさえ感じられる身体に少しだけ苛立ちを覚えながら、それでも横つ飛びに跳んで魔物の攻撃をかわす。

これは牽制のために剣を使う必要もあるか？　いや、別に魔術にこだわる必要はないんだ、剣術や体術だけで倒してしまったってかまわない。

そんな風に考えを巡らせながら腰に手をやつた瞬間、彼はよつやく自分が剣を携えていないことに気づいた。

「嘘だろ、おい……！」

思わず口を突いて出る言葉。一瞬遅れて、詠唱を中断させてしまつたことを悔やむ。

そこからは思考をフル回転させた。

『魔王』の力を借りた術が発動しなかつたのは、ここに自分がいた世界ではないからだ。なら、神の力を借りた術だって発動はしないだろう。使うなら精霊魔術か黒魔術。

グリーンドラゴンの攻撃を辛くもかわしながら、ルアルドは三度、呪文の詠唱にとりかかった。使るのは黒魔術。この世界に精霊の力が働いていない場合、精霊魔術だと発動しない可能性があるから。魔物の攻撃をかいぐり、どうにも反応の鈍い身体を懸命に動かして、ときには蹴りを、ときには拳まで放つて時間を稼ぐ。

とても長く感じられる十数秒が過ぎた。ようやく呪文が完成し、

自分の魔力にのみ依存するこの術なら間違いなく発動するという確信を持つて『力ある言葉』を発音する。

しかし、それは発動しなかつた。

その事実に、ルアルドは呆然と立ち尽くす。
横合いから、カナデの声。それは、まるで絶叫にも似た

「ちょっと！ 杖も魔法陣も使わないで、さっきからなにやつてる
の！」

絶望にも似た感情から、身体の動きを止めてしまうルアルド。さ
つきまであんなに必死になつて動かしていたというのに。
グリーンドラゴンの爪が、力の抜けた彼の右腕を捉える。迫りく
るそれをぼんやりと眺めながら、彼は疑問に思つた。

杖？ 魔法陣？ なんでそんなのを使う必要が……？

ルアルドの身体が吹っ飛ばされる。カナデの足元に転がつた彼の
瞳にあつたのは、驚きと疑問の色だけ。

「 つ……！」

殺される。このままでは、この魔物に一人とも殺される。
これから数秒後に起こりうるであろう、外れる余地のない未来の
予想。カナデがそれを抱いた刹那。

「 はつ！」

柔らかな髪色をした、ルアルドと同年齢くらいの青年が、細身の剣を片手にグリーンドラゴンへと飛びかかった。突然のことによりの思考は数秒間、停止する。

それでも、理解できることはあった。

ルアルドにとつてのそれは、自分は弱くなつたのだ、といつ認めざるをえない現実。

そしてカナデにとつてのそれは、助けに入ってくれた青年は自分がよく知る人物 ユン・リーゼンフォードであるという事実。

カナデは力の限り、軍に籍を置いている青年の名を呼んだ。

「 ユンユン！」

……ただし、彼女が独特のネーミングセンスでつけた、とつておきのあだ名で。

街に運び込まれ、ルアルドはカナデとユンから様々なことを教えられた。

大はラグナーシャという存在のことから、小はこの世界では魔術のことを『魔法』と呼んでいることまで。

「……と、まあ、こんなところかな。理解できた? ルウ」

「 る、ルウ……？」

思わず間の抜けた声を出してしまったルアルド。カナデは少し間延びした声を作り、「だ〜か〜らあ〜」と可愛らしく人差し指を振つてみせた。

「ルアルドだから『ルウ』。これから同じ世界に住むことになる仲間でしょ？ だったら親しみの篭もつた名前で呼びたいじゃん」

「…………」

ムスッとルアルドは黙り込む。彼にはこの世界に永住するつもりはないのだ。魔術　この世界では『魔法』だったからで元いた世界に帰らなければならない。

けれど、ムスッとする一方で、じんわりと心地のいい『なにか』が胸の奥に広がつたのも事実だった。

『仲間』。

自分から誰かにそう言つてやつたことは数え切れないほどあるが、誰かにそう言つてもらつたのは、思えば、初めてのことではなかつただろうか。

一週間後。

治癒魔法によって本調子に戻つた彼は、それでもまだ反応が鈍い身体に苛立ちを覚えながら、先日ふと思いついたことを実行に移すために王宮前へとやってきていた。

思いついたことと云うのは他でもない、元の世界に帰る方法だ。それはすばり、自分の中にある『黒き魂』を限界 正氣を保つていられる三分間を超えて使ってみるといつもの。自分から『黒き魂』に敢えて『呑まれて』みる 周囲の者を『破壊』することしか考えられない状態になつてみると、

上手いくかどうかはわからない。そもそも、ラグナーシャに『この世界に不利益をもたらす存在』と認識されて世界から弾かれても、それで元の世界に帰れる保証もないのだ。

それでも、今まで通りの魔法が使える世界に飛ばされさえすれば、その世界で「万理断章」^{カーリア・アーク}を使い、元の世界に帰ることはできるはず。

王宮の周辺には現在、あまり人はいない。視界に映るのはほんの数名ほど的一般人と、ときどき王宮に出入りする兵士の姿くらいのもの。

最初は、人気のないところで試すべきかとも考えた。

しかし『黒き魂』は破壊衝動の塊である。『呑まれた』とき、周囲に誰もいなければ、きっと『壊す』べき『人間』の姿を追い求め、最悪、一般人を何人も殺してしまうことになるだろう。それなら、最初から破壊衝動を向ける相手 兵士がすぐ近くにいる場所で『呑まれ』たほうがいい。幸か不幸か、いまの自分は身体能力がなぜか劣つてしまっているのだし。

欲を言えば、戦う相手はこの王国の三大将軍の誰かであつてほしかつた。『鬪将』、『知将』、『猛将』の異名を持つ彼らの中の誰か。その三人のうちの誰かなら、あるいは怪我をせずに『呑まれた』自分をいたしてくれるかもしれないから。

いずれ三大将軍の異名を継ぐだろうと言われている三人のうちの誰かでも、いいとは思うけどな。

それは次代の『闘将』と目されているアルトウール・ボーデンシヤツツ、同じく『知将』になると思われているホラント・ベルク、そして『猛将』を継ぐであろうレオンハルト・バルシュミーデという三人の武人のこと。まあ、次期『知将』の候補にはコン・リーゼンフォードの名前も挙がっているらしいが。

ルアルドはコンのお古だといつ長剣を構え、意識を『自分の内側』へと向けた。

「殲滅対象認定」

心がざわめき、凶暴な衝動が湧き上がってくる。
ふと、昂ぶる感情の波に揺られながら、

これから兵士相手に騒ぎを起こして……。このことを知った
ら、カナデは悲しむだろうな……。

などという意味のないことを考えた。同時に、カナデがときどき見せる沈んだ表情を思い出す。あれは自分の正しさを疑うときに入が見せるもの、決して軽くはない責任を負つた者の表情だ。ルアルドにはわかる、自分も何度も重い責任を背負つて生きてきたのだから。

彼女が自分に見せたあの表情は、以前、彼女から聞いた『祭典計画』に関係しているのだろうか。もっとも自分はもうすぐこの世界から立ち去る身。いくらカナデのことが気にならうと、じつしてや

る」こともできないわけだが。

やがて一分が経ち、一分が過ぎ、『黒き魂』の『力』を使用してからもうすぐ三分になるというとき。

王宮から二十代前半くらいの黒髪の青年が出てきた。

自分が正気を保てているうちに、トルアルドは彼の前に躍り出で、挑戦状を吊きつける。彼の名は確か

「俺と勝負しろ! 闘将アルトウール!」

「……いきなりなんだ? そもそも俺はまだ將軍になつたわけでは……。ふむ、お前は確かに、何日か前に渡来してきた奴だつたな。まだリーゼンフォード姓を名乗つていないと聞いたが」「

「うぬかこー いぐせつー!」

その言葉を最後に、ルアルドの正気は完全に消え去つた。

一瞬にして間合いを詰めた彼の剣が振るわれる。

しかし、それは抜き払われたアルトウールの剣によつて弾かれた。さすがは次代の『闘将』と目される男、ただの兵士に比べ、攻撃への反応が異常なほどに速い。身体が悲鳴を上げるような無理な動きで死角を突こうとするも、これもやはり防がれてしまう。

「スピードはかなりのものだな。だが力任せに剣を振るうだけでは、野にいる獣とをして変わらんぞ!」

教え、諭すようなアルトウールの物言い。それは弟子に稽古をつけてやる師匠のそれのようだ。

もちろんいまのルアルドは、その言葉が届く状態にない。目の前の敵を壊そつとがむしゃらに剣を振り回し、ときに蹴りを放つ。

そのことじごとくをアルトウールは表情を変えず、息を乱すこともなくいなしていった。

「死角を突こうとするばかりで、相手の隙を作りだす攻撃の組み立てができるいない。無理な体勢からでも攻撃を繰り出せること、その攻撃が必殺の鋭さを持つていること、見るべきところは確かにあらが、相手に当たらないのでは、それも宝の持ち腐れだ」

「うるせえ、黙れっ！」

アルトウールの言つてることはまさしくその通り。『黒き魂』に『呑まれて』いる状態のルアルドは、『不殺』の信念から生まれた、普段ならある『できる限り相手に怪我させたくない』という気持ちを持たない。そのため攻撃から『ためらい』がなくなり、普段よりも鋭い一撃を繰り出せるようになるのだが、反面、常に破壊衝動に身を任せているため、冷静な判断や精神を集中させることが不可能になる。

つまり、この状態だと攻撃を組み立てることはおろか、『技』や『魔法』を使うことすらできなくなるのだ。

とはいって、すべての『技』が使えなくなるわけではない。『黒き魂』の『力』を使用しているときにのみ使える特殊な『技』なら二つだけ、使うこともできる。

「 滅！」

これがそのひとつ。アルトウールに向けた掌からく黒妖崩滅波^{（ブラック・ストラッシュ）}のそれに似た、けれど明らかに性質の違う黒い波動が放たれる。

不意をつかれ、わずかにバランスを崩しながら黒の波動をかわす

次期闘将。

「魔法だと！？ 魔法陣も杖もないのに！？」

魔法ではない。技なのだ。それも自分の中にある力を外に撃ちだしただけに過ぎない。攻撃方法としては、アルトウールでいつところの『剣を振るう』と意識の上では大差のないものなのだ。もちろんルアルドにそんなことを口に出して説明してやるつもりはない。いや、してやりたくてもできない。衝動に身を任せ、身体を泳がせたアルトウールの腹めがけて素早く蹴りを叩き込む。

「……っ！」

声は押し殺したようだが、多少は堪えたのだろう。彼の表情が苦悶に歪む。この状態の唯一の取り柄といえるスピードを活かし、剣と蹴りを次々と、しかしメチャクチャに浴びていくるルアルド。

「はっ！ やまあねえな！」

アルトウールが地面に膝をついてうずくまつたあたりで、ルアルドはそう吐き捨てて猛攻を終える。最後に『滅』で消し飛ばしてやるうと、距離をとるために背を向けた。

それが、彼の隙となる。

「 ふっ！」

アルトウールの持つ剣が一閃。ルアルドの左のふくらはぎを横に斬り払った。

「なつ！？ き、汚ねえぞ、てめえ！」

しかしルアルドが表情を歪めることはない。痛みを感じていないのだから当然といえば当然のことではある。それでも脚に怪我を負つたのだ、彼の動きは確実に鈍った。

このままでは負けると思ったルアルドは、ほとんど反射的に固まつて『ギャラリー』いる数人の一般人のところへと駆ける。アルトウールが『逃げろ』と叫ぼうとしたが、さきほどの一閃そのものが、すでに死力をふり絞つてのもの。彼はなにも言葉にできず、血を吐いて咳き込んだ。

ルアルドが一般人のところに辿り着く。勝利を搖るぎないものにするべく、そこにいた女性の喉に剣をあてた。もちろんアルトウールを葬つたあとは彼女も殺すつもりだ。『呑まれた』ルアルドに『誰は生かす、誰は殺す』というような分別などありはしない。

そう、ありはしないはずだった。

「これ、なに……？ なんなの？ ルウ？」

女性の声。他でもない、自分が剣を向けた女性が発した声。

そして、その呼び方は。

わずかに怯えた表情で、少しだけ震える声で、彼女は続ける。

「……ルウ？ 大丈夫？ ねえ、一体なにがあつたの？ 因縁でもつけられたの？ それでキレちゃつてるとか、そういうことなの…

…？

怯えては、いるけれど。

震えても、いるけれど。

それでも彼女 カナデはルアルドに理解を示してくれていた。『だつて、ルアルドは自分から騒ぎを起こすようなことはしないもん』と、その目で語ってくれていた。そのルアルドの手で喉元に剣をあてられていながら、なお。

「カナデ……」

不思議なことに。

破壊衝動が鎮まつていく。

いつもの穏やかな自分に戻っていく。

剣を下ろし、彼は苦笑交じりに呟いた。

「だから、なんで『ルウ』なんだよ……」

そして「あ、正気に戻った」と笑うカナデに『もつと他にあるだろ』とつられるように笑いかけようとして

「たつ！」

後ろから、衝撃。

誰の攻撃だったのか確かめることもできず、ルアルドは地面に沈

み、気絶する。

ルアルドを氣絶させた青年　　コンにカナデは詰め寄った。正氣を取り戻していたのに、どうして、と。

コンはそれに静かに返す。

「それでもここで暴れていたのは事実でしょ？　おまけにアルトウールさんまで倒しちゃつたし。また暴れださないとも限らないから、ちょっとと当て身を食らわせて眠つてもらつたんだよ。

田を覚ましたら、ちゃんと事情を話してもらおう。どうしてこんなことになつたのか」

あまりの正論に、カナデは無言でうなずくしかなかつた。

田を覚ましたルアルドは、コンに意外なほど優しく問いかけられ、『黒き魂』を始めとした、こうなるに至つた経緯と理由をすべて話した。たとえこれで『ルアルドは得体の知れない存在』と怖がられても、それは仕方がないこと、と少し寂しく思いながら。

「なるほどね。元の世界に帰るため、か。でも人を一人や二人殺す程度じゃ、多分『不利益な存在』とは見なされないと思つよ？」

ほら、ここは平和な国だけどさ、それでも来訪者が王族の人間に危害を加えるつてことはたまにあつて。それでもその来訪者は投獄されるだけでこの世界から弾かれたりはしないんだよね。弾かれたかつたら、それこそ大虐殺くらいいはやらないと」

コンのあとをカナデが継ぐ。

「セツセツ。少なくとも『誰も殺したくないんです』なんて言つてゐつけは、世界から弾かれるなんてこと、まずないだろ？ねえ」

『黒き魂』の『力』を使つこと、それ自体が『世界の不利益』に繋がるのでは、トルアルドは思つてやつたのだが、それは黙つておくことにした。

そんな彼の内心の言葉には氣づかず、もつともらしく『うとうん』どうなずいているカナデ。それがあまりにもいつもと変わらない仕草だったものだから、ルアルドはつい尋ねてしまつ。

「あのせ、僕のこと怖くないのか？ ほら、いくら『呑まれ』てたから記憶が半分くらい飛んでるとはいって、カナデに剣を向けた事実は変わらないだろ？」

するとカナデはさよとんとした表情になつて、軽く首を傾げてみせた。

「ん？ 別に怖くなんかないよ。そりや、本当にルウの意思と無関係に、いきなりあんな風になつちゃうんだつたら怖いかもしれないけどさ、でも最初の三分間は正氣のままでござられるんでしょ？ だったら問題ナッシング！」

グッ！ と親指を立てられた。

「それに、何度も言つただけど、同じ世界に住む仲間だからね。
ねえ？ ゴン」

振りれたゴンは微妙な表情。

「やうだね。……いや、怖くはあるけどね。でも怖がつてただけの関係でいたいとも、思わないな。だって、そんなの寂しいじゃない」

「寂しい、か……」

「うん、やう。寂しい。つこでと言ひながら、もう一週間も経つのに、まだリーゼンフォード姓を名乗ってくれないのも、ちょっと寂しこかな」

リーゼンフォード姓。それはきっと、別々の世界からやってきた者たちを繋ぐ、絆のよくなものなのだろう。違う世界で生まれ、育つてきた者たちだから、リーゼンフォード姓とこう共通点を作り、自分たちを『同じ存在』と定義したいと願い、やうしたのだ。やうじと。

それを理解したルアルドは、

「やうだな。確かにもう一週間も経つたんだし、この世界から弾かれる」ともできないようだし、そろそろリーゼンフォード姓を名乗つて、この世界で生きていくって思うべきなんだらうな。でも、コソ。仕事とかはどうすればいいんだ?」

「ん~、やうだね。あのアルトワールさんと互角かそれ以上に戦えるんだから、兵士なんてのはどういへ。」

コソの提案に、しかしルアルドは難色を示す。

「兵士かあ……。でもあの人を倒せたのは『黒き魂』の『力』を使つたからこそだぞ。正直、あの力を使う気は僕にはもうないし、つ

け加えるなら魔法だつていまの僕には使えない。剣や体術なら一応、それなりにはできるけど、この世界に来てからは、どうも身体が重いっていうか、動きが鈍くなつてゐるし……

「身体が重くて、鈍い？ ああ、本来の能力が制限されちゃつてるんだね。わかるよ、僕もそうだから。でも大丈夫、徐々に慣れるつて。

それに、能力が制限された状態でもいいんだよ。大事なのはその心のあり様。『不殺の信念』を持つていて、だけで、きっと他の兵士とは違う働きを見せてくれるつて、ボクは思つかられ

「……そつか。じゃあ、当分はその方向で頑張つてみるかな。ようしへ、ゴン」

「うふ、よろしくね。アルちゃん」

「また出たよ、妙なあだ名…」 – 応訊くけど、なんでアル？ そして『ちやん』づけ？

「うん？ そりゃもちろん『ルアルド』からとつたんだよ。真ん中の部分を。『ちゃん』づけは親しみを筆める意味で」

「カナデもそうだけど、そのネーミングセンスなんとかしろよ… 次に来訪者が来たとき、そういう妙なあだ名をつけたら絶対戸惑われるつて…」

「えー、やうかなあ？ ゴンゴン」

「そんなことないよねえ？ ボクだって『ゴンゴン』って呼ばれるの、悪い気しないし」

顔を見合わせ、そんなことを言う一人をジト目で見ながら。

ダメだ！」つらー。早くなんとかしないと！

ルアルドはそんな風に思つたのだった。

「 獣滅対象認定」

その咳きが発せられると同時。

ルアルドの瞳に暗い色が灯つた。

それは、どこまでも暗く暗く昏くらく昏くらく。

背筋に震えが走り、黒ずくめの男は反射的に魔法を使う。たとえ苦もなくかわされるとわかつても、使わずにほいられなかつた。

「 ジャガーノートー！」

めきめきつ、と大地が悲鳴を上げた。 そう、その場にいたルアルドの身体と共に。

「 ……つー？」

驚愕のうめきが漏れたのは、黒ずくめのまつの口から。なぜ余裕

でかわせるはずの「ジャガーノート」を彼はかわさなかつたのか、と。

見えない圧力に押し潰され、片膝をついていたルアルドが立ち上がる。その瞳に宿るは狂氣にも似た昏い歡喜の色。

ニヤリと邪悪な笑みを見せたルアルドが、一瞬の間すら置かずに入っ込んでくる。懷に入るのを許してしまつたと同時、右の剣が振るわれた。

かろうじて一撃をかわし、黒ずくめは思ひ。

蹴りひとつで地面に沈んでいた奴はどうにいつた！？

「ジャガーノート」をまともに食らつたにもかかわらず、いまのルアルドにはまるで堪えた様子がみられない。スピードがさつきまでよりも遙かに速くなっているし、攻撃だつて異常に鋭い。まるで、まったくの別人を相手にしているかのようだつた。

と、杖を放り捨てたルアルドの左の掌が黒ずくめの胸元に向けられる。そして

「 滅」

まさかの、容赦のないゼロ距離発射。

無感情な、それゆえに恐ろしい印象を受ける眩きと共に放たれた黒い波動に、彼は遠くまで吹つ飛ばされ、尻餅をついた。

黒ずくめの耳にアリストシアの漏らした言葉が聞こえてくる。

「 これが、例の『力』……？」

例の、などと言われても黒ずくめにはわかりようがない。理解できるのは、目の前にいる悪魔のような青年が自分の命を狙っている

とこう事実だけ。

「う、 悪魔だ。あれを悪魔と呼ばずしてなんと呼ぼう。

その悪魔が地を駆ける。彼が『殲滅』する『対象』に『認定』した黒ずくめに向かって。

「 ひつー?」

そこに至つて初めて、黒ずくめは情けない声を上げてしまった。心が折れ、膝がガクガクと震える。

殺される…

立ち上がる事もできないま、けれど両腕を交差させ、攻撃から頭部を守ろうとする黒ずくめ。一瞬のち、その交差させたうちの右腕が掴まれ、軽く力が込められる。覚えたのは浮遊感。わずかではあるものの、黒ずくめの身体は地面から離れていた。

「 殺」

そして漏れる無感情な呟き。刹那、黒ずくめの内側に『なにか』が叩き込まれる。

それは『黒き魂』の『力』そのもの。『黒き魂』が右腕から黒ずくめの全身に行き渡つて、内側で暴れまわり、彼の『魂』を傷つけ る。

「 あ、 がつ……!?」

内側からの弾けるような痛みに、黒ずくめはただただ悶えた。そ

つすることしかできなかつた。

もつとも、『黒き魂』の『力』が暴れまわつたのは、ほんの数瞬のこと。ゆえに彼を襲つたのは、耐えられないほどの中痛というほどのものではなかつたのだが。

どさり、と身体が地面に下ろされる。それにわずかな安堵を覚える間もなく、蹴りを一発、一発と両の脚でほぼ同時に見舞われた。

すぐさま体勢を直すルアルド。とどめをささうとこゝのか、剣を手にしたままの右の拳がさらに硬く握られる。だが剣で斬り刻むつもりはないらしい。彼はあくまで拳のほうをこぢらに向けていた。

硬く握られた拳が振つてくる。その光景に黒ずくめが息を呑んだ。アリストシアも、また。

そして 。

ぼきつ、という嫌な音が辺りに響き渡つた 。

拳から いや、全身から力を抜き、昂ぶついていた感情を落ち着かせるために深呼吸をしてから、僕は剣を鞘に収めた。途中で投げ出してしまつた杖はまだ取りにいかない。だって、まだこの黒ずくめの男は生きているのだから。

まあ、もつとも。

『殺』を叩き込み、魔法を使うために必要な木製の杖も『ぼきつ』と折つてやつたんだ。正直、こいつにこれ以上の抵抗ができるとは

思えない。ちなみに、一発ほど蹴りを見舞いもしたけど、あれはいわゆる勢いでやってしまったものだ。そこで蹴りを入れるつもりは、本当はなかつた。

それにしても、身体のあちこちが痛くて仕方がない。言つまでもなく、さつきくジャガーノートを食らつたときに生まれた痛みだ。『力』を使つている最中は痛みを感じないけど、元の状態に戻れば当然、痛みも戻つてくるんだよなあ……。まあ、『生きている証拠』と前向きに捉えておこう。

あ、そうそう、黒ずくめのくジャガーノートだけ、かわそそうと思えばもちろんかわせた。それをしなかつたのは、ちょっと確かめたいことがあつたからだ。

元いた世界で『黒き魂』の『力』を使うと、その『力』の副産物なのかなんなのか、僕の半径一メートルくらいには『絶対領域』という一種の結界ができていた。それはその範囲内であれば、風の吹く向きや重力の働く方向を始めとしたあらゆる事柄を、僕にとつてプラスに働かせることのできる領域。ちょっと御幣ごへいのある言い方をするなら、すべてを自分の思うがままにできる能力だ。ゆえに、その領域内でなら僕には絶対に死は訪れない。誰かと戦つて殺されることはなかつたのだ。

これが破られるのは、同じく『絶対領域』を持つ存在 僕と同じ『天上存在』 がその範囲を僕の領域の範囲に被せてきたときだけ。そのときだけ、『絶対領域』は無効化される。

でも僕は『天上存在』の中でも特に強い『力』を持つ人間だったらしいから、『呑まれた』ときの僕を止めるには、いつもいつも仲間が数人がかりで『絶対領域』を無効化してくれていた。

しかし、今回の「ジャガーノート」しかり、いまは闘将の地位についたアルトウール將軍に脚を斬られたときしかり、どうも僕の『絶対領域』は、この世界では発動していないらしい。まあ、それならそれでかまわないんだけどさ。僕はただ、発動するのかしないのか、それをちゃんと確かめておきたかっただけだから。いや、だつてもつたいないじゃないか、世界から弾かれる可能性も踏まえた上で『力』を使ったんだから、その確認くらいはやってしておかないと。

なんにせよ、『絶対領域』は発動しなかった。

そして僕が世界から弾かれることもなかつたし、黒ずくめを捕まえ、アリストシアさまを救出することもできた。うん、めでたしめでたしだ。

と、黒ずくめが地面を這い、僕が一番最初に弾き飛ばした短剣に手を伸ばした。なんだなんだ、まだ抵抗しようつてのか？
なにをどうしても無駄だと思つんだけどなあ、と思つた瞬間。
彼の両の掌が眩い光を放つた。

これは、魔法！？ でももう杖は

「 テ、レポー……ト……」

弱々しく、それだけを呴いて黒ずくめは姿を消した。悪役然とした捨てゼリフすら吐かずに。よほど余裕がなかつたとみえる。いや、そんなことよりも、だ。

「うわ、やられた！」

「ど、どうなつてますの！？」

舌打ちしてから姫に顔を向ける。

「あの短剣、魔法を使うための媒体だったんですよー。よくよく考えてみたら、発動媒体に杖以外の物 たとえば小剣とか使つていい奴つてディリトリシアにもいますもん！」

ああ、参った。最後の最後でやられた。油断してたといつてもいい。

両のグローブが光つたのは、逆五芒星と六芒星の魔法陣を同時に使つたからだろう。テレポートは均衡を崩す力と保つ力、両方を使う必要があるから。

「まあ、いつまでも悔しがっていても仕方ありません。アビゲイルさまと合流して王宮に戻りましょう、姫」

「え？ ええ、そうですわね」

そうして、僕たちは帰路につく。途中でアビゲイルさまと合流し、王宮に到着したのは、太陽が西の空に沈もうかといつ頃のことだった。

黒ずくめの男。

魔法使いでありながら、彼は僕の『それなり』の剣や体術を見事にかわしてみせた。

あいつとは必ず、またどこかで相まみえることになるだろつ。だから僕は、そのときまでコソに稽古をつけてもらい、剣の技量を上げておひつと思ひ。

奴と再び対峙したとき、むつ『黒き魂』なんていう忌むべき『力』なんかに頼らなくても済むよつこ。

彼女のためだけに動く彼は、穏やかさと激しさを併せ持つ人だった（後書き）

作者：ルーラー

波紋の広がることのない、けれど波ある心を持つていたいと彼女は願つ

波紋のない、けれど変化がないわけではない、たゆたう水面。
ひと
他者の綺麗なところも醜いところも、全部笑顔で受け入れられる。
感情が激しく動きはするけど、決して爆発はしない。

そんな人間で、わたしはありたい 。

夕焼けによつて赤く染まつた街を、僕はアリストシアさまとアビゲイルさまを伴つて歩いて歩いていく。姫たちを王宮に送り届ければ今日の仕事は終了。あとは心置きなくカナデといぢやつけるはず。

そんなことを考えながら歩を進めていくと、街の中心にある噴水が目に入った。そしてそこには、噴水から少し離れて立つている少女の後ろ姿もある。

短く切り揃えられている茶色がかつた髪。お世辞にも平均に達しているとはいえない身長。彼女が誰か、それだけの特徴で僕にはすぐわかつた。ありやカナデだ。

ふと、イタズラ心が首をもたげた。人差し指を立てる仕草で後ろの一人に『静かに』と伝え、そろりそろりと背後からカナデに近づいていく。もちろん気配は完全に消して、だ。

そして

「よつ、カーナデつ！」

彼女の背後からがばっと抱きついた。ちなみに、身長差がけっこうあるため、抱きすくめるといつか、後ろから包む込む感じになつていたりする。

カナデはぐるりと顔だけでこちらに振り向いて、

「あ、お帰り、ルウ。無事に帰つて来れたようだなによりだよ」
驚きもなく、照れた様子も見せず、にぱつと無邪気な笑顔を浮かべてみせた。頬が少しだけ赤く染まつてはいるが、それはもちろん夕日のせい。

そう、よく夕焼けで頬が赤く染まつてゐるよう見えて、実は……、みたいな展開を本で見かけはするが、これは正真正銘、夕焼けによるものだ。彼女曰く、不意に抱きつかれるのには基本、慣れてるのだとか。

しかし、僕ひとりが（若干とはいえ）照れてては、なんとなく悔しい。

なのでカナデの両肩に手を置いて、全身をこちらに向かせた。それから彼女の両肩に置いた手はそのままに、カナデの脣に自分のそれを近づける。

「ん……つー？」

触れると同時に、カナデがぱちくりと目を瞬かせた。しかし身体を強張らせるこではない。その代わりといふわけではないだろうけど、彼女の体温がどんどん上がっていくのがわかつた。

カナデが瞳を閉じる。僕はそれに『黒き魂』を使ったときは違う、けれどあれよりも抗いがたいいや、抗おうと思えない衝動を覚え、同じく田を瞑ると、彼女の唇を舌で割り、口の中に入り込ませた。

「……ふあ、ん……、くう……」

カナデの舌を求めるも、焦らすように口腔をまわぐつこくべ。

「んあ、ひゃ……、んう……」

カナデもまた、舌を伸ばしてきた。それを包み込むように絡めとる。

ぴちや、ぺちや、と唾液が混ざり合いつす。唇から漏れる甘い声、甘い吐息。少しだけ引こうとした彼女のそれに執拗に舌を絡ませると、カナデは両の手で僕の背中をぎゅっと掴んできた。

「はあ……、ふう、ふああつ……ー」

手が僕の背から離れ、バタバタと床を泳ぎ始める。田を開けて見てみると、彼女の頬は真っ赤に染まっていた。けど、それは照れなどの感情の表れではなくて。

「む……、んくつ……、むううつ……ー」

あ、そろそろ限界っぽい。

そう判断し、そつと唇を離す。「……ふはあつー」と大きく息をするカナデ。

「し、死ぬかと思つたあ……！」

「や、いつも言つてゐるだろ。窒息死しそうになる前にキスやめていいつて」

わうじやないとムードもなくなるし。

「だ、だつて、ルウとしてるんだから、一秒でも長くしてたいて思つじゃん。こればっかりはしようがなによ」

そのストレートな物言いに、僕は一瞬言葉に詰まる。

「う……。で、でもなあ。それでもし本当に死んだりしたら、死因、なんて説明しようと？」

「あハハ……」

縮こまるカナデ。しかし開き直ったかのように彼女はすぐ胸を張る。

「まあ、でもいまはそれのおかげで止まれたんだから、それはそれでいいじゃん！ ほら、これ以上はここじゃマズイし、子供の目にも毒だしね」

カナデが目で指したのはアリストシアもまたちではなく、噴水を挟んでこちらを見ている年端もない一人の男女、そしてその付き添いと思われるひとりの兵士だった。

「……つて、ゴンジやないか！？」

「や、二人とも。昼間から……じゃないけど、お熱いね。でも外ではほどほどにしておいたほうがいいと思うよ？ それとカナデ、いまのだけで、もう充分に子供には目の毒だつたと思う」

「え？ そ、そう？ あははは……」

『まかし笑いを浮かべながら、改めて一人の子供に目を向けるカナデ。

二人はカナデが開いている私塾に通っている子たちで、僕ともそれなりに面識があつたりする。確かに目にかかるくらいまで黒髪を伸ばしている男の子はアビエル、茶色い髪をツインテールにしている女の子はライザといつたはずだ。年齢はどちらも九歳。

ふと、たたたつ、とアビエルがカナデのところに走り、彼女の服の裾を掴んだ。大方、先生を僕に取られたとか思つたのだろうが、どつこい、取られた感バリバリなのは僕のほうだ。そんなわけで、

「殲滅対象にんて」

「ちょっと！ なに軽々しく『黒き魂』の『力』を使おうとしてるの！」

カナデのツッコミが飛んできたが、僕はそれに大声で叫び返す。

「うるさい！ カナデに近寄る男は皆、僕にとつて殲滅の対象になるんだ！」

「子供だよ！？ 男である以前に子供で、わたしの教え子だよ！？」

「それでも男であることに変わりはないだろ？！　男なんてなあ、一皮剥けば皆ケダモノなんだぞ！」

「うん。とりあえず、カナデと激しくいかけついてたアルちゃんが言つていいことじやないよね」

「コソのなんとも冷静かつ的確なツッコミ、黙らせるをえなくなる僕。

その隙をついてカナデがアビエルとライザに帰るよう促した。くそ、覚えてろよ、アビエル！」

子供一人が去り、僕は話の矛先をコソに向けることにした。といつても別にハツ当たりとかじやない。あくまで正当な文句だ。

「それはそとコソ、僕の未来視、今回はちゃんと当たったぞ。おまけにけつこう苦戦もした。ぶっちゃけ『黒き魂』を使うハメになつた。更に更に、肝心の誘拐犯は取り逃がした。僕の未来視を信じてお前が一緒に来てくれりや、もっとスムーズにいつてただろうし、取り逃がすこともなかつたはずだ。どうしてくれる」

「自分の実力不足を棚に上げての発言はボク、感心しないなあ」

「それはわかつてるよ。だからまあ、今度みつちりとお前の流派の剣術を叩き込んで欲しいわけなんだが」

「了解。でもさ、アルちゃんの実力不足を棚上げするとしても、『今回は当たつた』でしょ？　未来視。必ず当たるとは限らない以上、僕もそう軽々しく王宮を離れるわけにはいかないんだよ。ほら、特にいまは時期も時期だからね」

時期も時期。それはきっと『祭典計画』のことを探しているのだ
るべ。

「それもその通りなんだけどさ、それでも、もつといつ……。まあ、いいや。これ以上言つても不毛なだけだし。でもさあ、なんで僕の未来視はいつも精度が低いんだろうな。本当、この精度の低さのせいで何度も酷い目に遭つたか……」

「カナデに告白する前に未来視を使つたら、カナデに振られるところを見ちやつて、『こうなつたら、前に進めるよう、告白して玉砕するぞー!』って告白に臨んだこともあつたもんねえ」

あつあつた。あればマジで酷かつた。外れてくれてよかつたといつ思いはあつたが、それ以上に『この精度、もうちょっとどうとかならないのか!』と思わず憤つてしまつたものだ。

「ああ、それで告白してくれたとき涙田だつたんだ、ルウ」

涙目になつてたんだ……。

がつくりと肩を落とす僕。それから、コンの「とりあえず、雑談はアリストシアさまたちを王宮まで送りながらにじょうづか」という提案により、カナデとコンを加えた僕たち五人は歩みを再開した。

「そりいえばカナデは不意に抱きつかれるのに慣れてるって言つてたけど、なんで慣れてるの? というか、誰に抱きつかれても平気なものなの?」

王宮までの帰り道。最初にそつ話題を振ったのはコンだった。

「うん？ 知らない人とかルウ以外の男の人に抱きつかれたりしたら、そりや、やっぱり平気じゃないよ。それと、不意の抱きつきに慣れてるっていうのは、わたしの妹に抱きつき癖があつたから」

「妹がいたんだ！？」

「初耳です……！」

「似てるの？ ソックリ？」

驚きの声を上げたのは、僕を除いたコン、アリストシアさま、アビゲイルさまの三人。や、僕は前に聞いたことがあつたものだから。

「もちろんそつくりだよ、ゲイル。元氣で、陽氣で。ちょっと身体は弱かつたけどね」

や、アビゲイルさまのことを『ゲイル』って。カナデ、なんて失礼な女……。

しかし、そこに突っ込む奴はいないらしく、話はそのまま続いていく。

「あの、『ちよつと身体は弱かつた』と仰いましたが、過去形なのは、いまは元気になつたから、なのですか？ それとも……」

「後者だよ。妹は九歳のときに死んじやつたから。あ、でもこれが病死じゃなくてね。魔法の暴走による事故なんだ。わたしと違つて妹は魔力、強かつたから」

「そ、そりやしたの……」

しんみりとした空気が流れる。それを望んでいないカナデは雰囲気を明るくしようと僕に話を振ってきた。

「ルウは？ ルウは兄弟つっていた？」

……それ、以前カナデに言つたことあるぞ。

「兄がひとりいるよ。戦いの苦手な、文系の兄上。 ジンは？」

「ボク？ ボクは一人っ子。というか、天涯孤獨なんだよね、これでも。剣の師匠のところにお手伝いみたいな感じで下宿させてもらえて、おまけに剣も学べたから恵まれてるほうだとは思うけど」
や、全然恵まれてないだろ……。

「で、その師匠がまた陽気な人でね。あと、とんでもないお人好しあつたよ」

「なるほど。お前のお人好し気質は、その師匠譲りなわけだ」

「え？ ボクはお人好しなんかじゃないよ。むしろアルちゃんのほうがお人好しじゃない？」

「それはない！」

「そんな大声で否定しなくとも。エピソードとしては……、ほら、娼館しょうかんで働いてた娘を身請けして、そのまま自由にしてあげた、みた

いなこと、ない？」

「ないよー。そもそも娼館に行つたことすらないしー。というか、なにか？　お前はやつたのか！？」

「ボクじゃなくて、ボクの師匠がやつたんだよ。なんでも友人に無理矢理連れて行かれて軽くイライラしていたところに、いかにも不幸そうな表情をした娘がいたものだから、『幸福でない者を見ていると腹が立つ！　ワシのあずかり知らぬところでならまだしも、ワシの目の前で不幸になどなるな！』って余計に苛立つちやつて、つい勢いで助けてあげちゃつたんだつて」

「つい勢いで人を一人助けてるのか！　芯からお人好しだな、お前の師匠！」

「その娘、買つてもらつた以上は云々かんぬんつて言つてたんだけどね、『お主の幸福がワシの幸福。本当に感謝しているのなら、人並みの幸福を手にし、それを見せに来るがよい』って言つて真っ当な働き口を紹介してたよ」

「かつてえな、その師匠！　というか、けつこううな年齢の方！？」

「ボクにとつては師匠であると同時に、優しいおじいちゃんでもあつたからねえ。まあ、普段はおじいちゃんじやなくて師匠つて呼んでたし、師匠が亡くなつてからはボク、修行を兼ねて放浪の旅に出ちゃつたから、正直、あまり孝行者ではなかつただろうね」

「したのか、放浪の旅」

「そりやしたよ。己の剣に磨きをかけるためにね。そういえばその

旅の途中、何度か世界征服や滅亡を企む組織や輩やりと戦つたな
あ」

「何度か世界救つてゐるのかよ、お前!」

「懐かしいなあ、傀儡戦争かいりきせんそう」「

「懐かしげることじやないだろー」というか、「冗談だよな!」「冗談
ぐらい何度があるでしょ?」「

「えー、でもさ。アルちゃんだつてカナデだつて世界を救つたこと
ぐらい何度があるでしょ?」

「あるわけないだろ、一度だつて!」

「やう言つてやりたいのは山々だつたのだが。

「まあ、何度があつたけど……」

「あるんだよな、」これが本当に。そういうやあのエルフたち、いま元
気にやつてるかなあ。それに、最後には改心したけど、魔王復活を
企んでいたあいつ、ちゃんと真つ当な人生を送つてゐるかなあ……。

しかし、いくらなんでもカナデにはないだろ?、こんな経験。そ
う思つて彼女のほうに顔を向ける。そういうえば彼女の妹に関するこ
と以外は、あまり聞いてないんだよなあ、なんて思いつつ。
対するカナデの反応は。

「ああ、あつたあつた。それはもう数え切れなくぐらいあつたよ。
世界救つたこと

「マジですか。」

「一番印象深かったのはあれだね、『第一研究所炎上事件』。えっとね、第二研究所で行われていた研究つていうのがさ、特殊な魔法陣を用いて、とある宝玉と世界そのものをリンクさせるつていうものだつたんだけど、そこで爆発が起きて火事が起きちゃつたから、さあ大変」

「それは、マジで大変そうだな……。つまりはあれだろ？ 研究所の消滅はイコールで世界の消滅に繋がるという」

「まあ、いま考えたでっちあげの事件だけどね！ 実際は悩んでいる人の相談に何度も乗つてあげた過去があるってだけ」

「な、なんだ嘘かよ……。てっきり本当に何度もなく世界レベルの危機を救つたことがあるのかとばかり。」

不意に、ほう、とアリストシアさまが感嘆の息をついた。

「こうして聞いてみると、割と誰にでもできることなのですね、世界を救うというのは」

「いえ、それは違うと思

「そうだよ、アリス」

僕のツッコミはカナデに遮られた。といつか『アリス』つて、また失礼な……。

「世界を救うつていうのはね、人を一人救うつていうこととイコールなんだから。十人の人を助ければ、当然、十回世界を救つたことになるんだよ。『精神世界』っていう言葉が存在しているのがその証拠」

それは違うだろう、と突っ込んでやりたいものの、そうキッパリと言われるとなにも言い返せなくなる。

「そんな風に世界を何度も救つてきたわたしから、ルウとコンコンにアドバイス！」

負の感情はなるべく、負の感情として取り入れないようにしたほうがいいよ。それは人間として生きていく上での基本にして究極だからね。

そして、仮に負の感情を取り入れてしまったとしても、あまり溜め込まないこと。できる限り速やかに吐き出すように。

だって、負の感情に、同じ負の感情を以つて臨んでも、そこには争いしか生まれないからね。わかった？」

ぴつ！ と人差し指を立ててみせるカナデ。僕とコンはそれに黙つてうなずいた。

「うん、よろしい！」

そう言つてカナデは偉そくに胸を張る。
そんな彼女を見ながら、ふと思つた。

この世界にやつてきたばかりの頃。『黒き魂』に『呑まれ』た僕を正氣に戻すことができたのは、きっとカナデがこういう考えの持ち主だったからなのだろう。そして僕が彼女を好きになつた理由も、きっと。

それからも他愛のない話を僕たちは続けた。アリストシアさまたちを含め、もつと話していくくて道端で立ち止まつたりもしながら、ゆっくりと王宮を田指す。

結局、姫たちを王宮に送り届け終わったのは、あたりがすっかり暗闇に包まれてからのことになつてしまつた。

街の高級住宅街にある一軒家。

そこに住む少女 ライザは夕方に見たルアルドとカナデのキスシーン（それもディープな！）を思い出し、顔を真っ赤にしていた。まさか、ややもすると男勝りな印象さえ受ける、あの姉に恋人ができていたとは、と。

そう、彼女の姓はリー・ゼンフォード。ライザ・リー・ゼンフォード。元の世界ではカナデの妹として存在していた、転生型来訪者だつた。

波紋の広がることのない、けれど波ある心を持つていてないと彼女は願つ（後書き）

作者：ルーラー

斯ぐも幼き双つのシカイに映る偽りの世界は、斯様に傳へ輝きます

黒く潮の匂いを湛える空氣の中に、幼き少女と少年が立っていた。巷で評判が上がり始めている球体関節人形のように見目麗しい姿であり、その表情も無機質で凝り固まつたものという様子である。ふくらみ始めたばかりの乳房や、絢爛豪華な衣装ですら人形そのもののように、それこそ人形そのもののような、絵画から出てきた貴族のような風貌である。

対照的に少年の方は、何年も使い込んだような灰色の布を頭から被り、その顔は一切見えない。少女が体格の良い美人であるとすれば、少年は痩せ細り身長も少女に比べて頭一回り小さかつた。恐らく同じ年代の少年達と比べても著しく小さいその背丈は、少年がまともな食事をしてこなかつたことを表しているのかもしない。

そして少女と少年は、服装さえなければ見紛うほどよく似通つていた。

二人は海岸に並び、遠き海を只管に眺めていた。少女は艶やかな髪が傷むことを気にもせず、少年は少女と共にいるために集まる視線を気にもせず。もし此処に画家がいたのなら、そんな二人のことを見かずにはいられなかつただろう。それは如何にも油彩画じみた構図であつたし、何よりどんな兄弟姉妹よりも互いに互いの特徴を映しあつたような顔をした彼らの他に刺激的な題材があるはずもない。

然し此処には画家はいなかつたし、たとえ了一としても画くことは躊躇われただろう。貴族然とした少女と奴隸風の少年と共に描くことは無礼であるし、許可を取れる様な柔らかい表情を一人が一人

とも浮かべていなかつたところもある。

少女と少年は身じろぎひとつしない。はたはたと、服だけがアドルナ海から吹き寄せる潮風にゆらめいている。その退屈な見世物に、集つていた観客達も散り散りになつていく。

少年が口を開いた。

「死んじやつたね」

「……」

少女は答えなかつた。一人の間に再びの沈黙が落ちる。

「残つたのは、君と僕の一人だけだよ……。君や君のお父さんが、君のお父さんの息子を快く思つていなかつたとしても、そんなことは関係ないんだ。君のお父さんの力で君のお父さんの息子が隠されていたのはもう、過去のことなんだから……」

「……」

「きっと僕は、リーゼンフォードに追われる。そもそもこれまで予知能力者に見つからなかつたのがおかしかつたんだ。明日にでも僕はリーゼンフォード姓になるだらうね。転生なんて 本当、するものじやない……」

「……」

「だけど僕はそれを否定する。お父さんもお母さんもお爺ちゃんもお婆ちゃんも親族丸ごと失つた君に同情して、僕はこの姓のままでいたいと思う。たとえリーゼンフォードに追わることになつたとしても」

少女の耳が、ぴくりと動いた。ギギギ、そんな擬音を挟んで、少女の顔が少年へと向いた。

「……それでは、あなたが殺されてしまつわ。リーゼンフォードでない渡来者は、身分を保証されないの」

少年はざいじちない、頬の筋肉が引き攣るような微笑を浮かべて言う。

「それでも構わないよ。墓石こ、君と同じ名を刻めるのならば……」

「……」

少女は何も答えなかつた。顔は先程までのように能面に戻り、視線も広がるアドリア海に固定されている。少年も何も言わなかつた。ぱしゃ、ぱしゃと海岸に打ち付ける波だけが微かな音を立てている。日は沈み、街も静まる。アドリア海に面するこの街も、まもなく今日という一日を終えようとしている。それでもこの二人だけはそこに立ち尽くし、ただ海だけを見つめ続けている。別れを惜しむ親友であるかのようだ。

周囲から、声はかかるない。いつの間にか、あたりには人っ子一人見えなくなつていて。この街では地形的に強い結界を張ることが出来ないため、夜間はしばしば魔物ができる。その被害に遭わないとめに街の人々は日暮れと共に家にこもる。そこにいる一人を置き去りにして。

少女と少年はいつまでも海を、あるいは海の先にあるアズファーダを見ていたのかもしれない。

そんな二人の空氣を壊したのは、陽気そうな二人の声だった。

「つたくよー、どうして俺がこんなところにいなくちゃなんねーんだよ……。こんな仕事、下つ端どもにやらせりやいいだろうが……」

「あなたがボードゲームばかりやつていいからでしょう……。相方の私まで評価が下がるのは心外ですので以後やめていただけると助かります」

「ああはいはい、俺が悪かつたですよ……。ところで坊主たちは、こんなところで何をしているんだ?」

唐突だった。

少女と少年の背後に、男と女が立っていた。橙色の髪を盛大に撥ね上げ見た目だけで重そつだとわかるナップザックを持った男と、絹糸と見紛うばかりに細い髪を撫でつけ腰にスラリと長い長剣を挿している女性。違和感のあるその服装は随分と古びていて、彼らがこちらに来てから長期間、リーゼンフォードに属していないことを示していた。

そして彼らの来訪と同時に

街の空気が　ざわめいた。

それはかつて、戦争の便りが街に届いたときの反応に似ていた。勿論、長く平和なこの街にそのことを知る者など最早残つてはいない。ざわめきは次第に大きくなつて、街全体を覆い尽くしていく。

次第にあちこちから、「祭りだ!」「祭りだ!」という声が聞こえてくるようになるまで、さほど時間はかからなかつた。

「ところで、嬢ちゃん坊ちゃんはこんなところで何をしているんだ?」この辺は結界が甘いからさつと家に入れよ

その言葉に、少年はびくりと肩を動かし、少女はまつたく動かなかつた。その反応に男は不満そうに眉を顰めると、ふいと顔を背ける。代わりに女性が言った。

「ああ、ごめんなさいね……。」この人気に入らないとすぐこうだから……。見たところ、男の子の方は渡来人みたいだけど、その格好だとリーゼンフォード姓じゃないわね……。だったら今は中央には行かないほうがいいわよ。これから”お祭り”が始まるみたいだから、リーゼンフォード姓の人も増えて大変だから。私たちもそれから逃げてきたんだけどね……。もつとも、これからリーゼンフォードになるつて言うなら話は別だけれど……」

「……あ、……ありがとうございます……。でも、なるつもりは……」

「ちひ、しゃべれるんじやねえか! だつたらさつと会話すりやあいいんだよ、会話すればよ!」

「ヤスクノフ! もうちょっとと言い方はないの?」

ぴしゃりと叱り飛ばす女性に対して、ヤスクノフと呼ばれた男性は再び顔を背ける。女性は再び微笑を浮かべると少年に向き直る。「それで……、よかつたらだけど私たちと一緒に来る? 少なくとも、リーゼンフォードに入る気のない君はこっちのほうが安全だと思つけど」

「……行きません。結構です」

少女の声は冷たかつた。少年はそれに顔を振つて追従する。

「そう、なら何をするのもいいけど頑張つてね。あ、名前……、教えてもらつてもいい?」

「……」

名前を尋ねられて、少女は沈黙した。

「彼女の名前は……、パメラって言います。……僕はディルク

「!?

「……? ……? ……?」

少年が少女の名を口にした瞬間、二人は少しだけ身じろぎした。然し一人ともすぐに普段どおりの顔に戻ると、ヤスクノフはポケットに手を突っ込んで、小さく白い陶器のようなものを取り出した。それを女性が受け取つて、少女に差し出す。

「そう……、私はトールスつて言つたの。それで、もしかなんだけど、この先リナ・エンドウっていう人に会つたらこれを渡してくれないかしら、パメラちゃん。もちろん、無理に会いに行けなんていうつもりはないんだけれど」

トールスはそこで一度言葉を切ると、じっとパメラの目を見つめて言つた。

「そうすればきっと、あなたがどうして渡来者じゃないか、その理由もわかるわ」

パメラは首を傾げ、

「…………、きつと…………?」

傾げた首を戻して言つた。

「なら……、いい」

それを聞いたディルクが、恭しく礼をした。

こうして、幼き少女と少年の旅は密かに幕を上げた。二人は最後まで気づかなかつたが、奇しくもその日は聖女「リナ・エンドウ」の来訪日その日であつた。

斯ぐも幼き双つのシカイに映る偽りの世界は、斯様に輝く輝きます（後書き）

作者：るつぴい

一人のミーナは偶然出逢い、そしてそれを必然に変える

少女と、その母親が、歩いていた。
少女は突然足を止め、車道に出る。
母親は気づかず、歩き続けている。
大型のトラックが少女に迫る。

少女は、それをただ見つめていた。
声も上げずに、ただじっと見つめていた。
「ミーナ！」

母親が、異変に気づき声を上げる。
しかし、少女は動かなかつた。

何かに操られたかのように、立っていた。
次の瞬間、彼女の体は中を舞つた。そして、離れたところへ落ち
る。

「ミーナッ！…」

母親が少女に駆け寄る。

トラックの運転手も、少女の元へ走つてくる。
それを見た住人達が、次々と家から出て、少女の周りに人だかり
を作る。そして、少女に声をかける。
それでも、少女は動かなかつた。

「ミーナ……」

少女の魂は、この世界から、消えてしまった。

気づくと、そこは彼女が今までいた場所ではなくなつていた。

「何……ここ、何処……？」

そこは、何も無い広い草原だった。

「どうして私こんなところにいるの……？」

「あり、貴女トリップの人？」

「…あ、あのつ、私つ……」

「トリップで間違いなさそうね」

「と、とりつぱー？」

「そり、トリップ。異世界からこの世界に渡来してきたひとたちのことよ」

「それが、私なの？」

「そうよ。貴女、名前は？」

「ミーナ……。ミーナ・フィルスです」

「あら、私と同じ名前だわ」

「え？ 貴女もミーナっていう名前なのー？」

「ええ。私はミーナ・アウラトス」

「“アウラトス”って、“黄金の”っていう意味の？」

「その通り」

女性がやわらかく微笑む。

「同じ名前なのも、何か縁があるのかもしれないわね」

「あ、そうだ。ミーナさん」

「何？」

「どうすれば、私はもとの世界に戻ることができるの？」

「……」

「？」

「無理に近いわよ」

「えつ！？ な、何で！？」

「貴女がトリップしてきた原因、何だった？」

「えつと……、あれ？ 何だつけ……？ でも、事故だった気がする……」

「……」

「そ。貴女は、交通事故がきっかけで、この世界に渡来してきたの。

そして、貴女が元々いた世界では、貴女は亡くなつたことになつて

いるの」

「そんな……」

「でも、まだ可能性はあるわ」

「え……。良かったあ……！」

「事実かどうかはわからないけれど、ね」

「それって……」

「風の噂つてどこかしら」

「それでも、それが本当なら、私は戻れるの？」

「そうよ。本当だったら、戻れるわ」

「どんなことをすればいいの？」

「少し落ち着いて。まずは、お祭り会場へいきましょっ」

「お祭り会場？」

「やつ。そこで、リーゼンフォード一族の方に、貴女がトリッパー
だつてことを報告してこなきゃならないの」

「よくわからないけど、そうしなきゃならないのね」

「そうよ。だから行きましょう」

女性が少女を促す。

「はいっ」

二人は、お祭り会場へと足を進めた。

一人が辺り着いたのは、祭典が開かれ、とても賑わっていた。

「着いたわ。ここよ」

「わあ……」

「リーゼンフォード一族の方は何処にいらっしゃるかしら……」

「本部とかにいませんかね……」

「そうね。試しに行つてみましょっか」

「はいっー！」

少し歩くと、祭典の本部が見えてきた。

「あそこね」

「ちょっと見てくるわ。リーゼンフォード一族の方がいらっしゃ
たら、貴女のことを報告しておくれから、待つてくれる？」

「わかつた！」

「じゃ、行つて来るわね」

「はーい」

少女は、小さな小屋に入つていく女性の背中を見送り、その場にしやがみこむ。

（なんか、大変なことになっちゃつたなあ……。これからどうすればいいんだろう……）

少女の周りをたくさんの人々が通り過ぎてゆく。

（つていうか、なんで私がこんな目に遭わなきゃなんないのよお……）

…

遠くの方で、笛の音色が聴こえてくる。

（そもそも私がこつちの世界に来た原因……あの事故のときの記憶が曖昧なのはなんで？）

少女は空を見上げる。

（あの時どうして車道にでたんだる、私……。思い出せないや……）

「ミーナちゃん、お待たせ」

「あっ、ミーナさん！…どうでしたか？」

「リーゼンフォード一族の方のこと？」

「はいっ」

「それなら大丈夫。貴女がトリッパーだつてこと、ちゃんと報告してきたわ」

「それで、これから私はどうすればいいの？」

「そうねえ……。急がなきや、あなたの“身体”が貴女の元々いた世界から無くなつてしまつものね」

「……あの、その私の体が無くなるつていうのが、イマイチしつくりこないんですが……」

「ああ、詳しく説明していなかつたわね、それについて」

少し考えるそぶりを見せてから、女性は、話し始めた。

「まず、貴女のいた世界では、もし人が亡くなつたら、どうしててる？」

「えつと……。お墓に入る……？」

「その前に、なにかするでしょ！」

「え……？あ、お葬式……」

「そりゃ。そのとき」「遺体を火葬してしまつてしまふへー。」「……！」

少女は何かを悟り、黙り込む。

「それが、“身体”が無くなるってことよ」

「そんな……。だったら、本当に時間が無くなつちやうござん！」

「！」

「だから、急がなきやならないの」

「どうすれば、戻れるのー？」

「……戻れる可能性は、ゼロに近いわよ」

「そんなあ……」

「ひとつだけ、方法があるけれど、風の噂だし、成功するかも、事実なのかも分からぬのよ……」

「それが本当なら、戻れるんでしょーーー。わつわもわつわも言つてたじやない！」

「本当なら、だからね？」

「じゃあ、やつてみよつよーーーやらなしのよつは、マシでしょ？」

「わづね。やるだけやつてみましょうか」

その言葉に、少女は頷いた。

「それじゃ、行くわよ。ついて来てね」

「行くつて、何処へ？」

「西の森に」

「どうして？」

「そこへいけば、戻れるかもしれないっていうのが、風の噂の内容だからよ」

「……」

「つこてこれるわね？」

「はいっ……！」

二人は、西の森へと足を進めた。

その途中で、少女は、こんなことを呟いた。

「もし戻れなかつたとしても、ミーナさんと一緒になら、大丈夫かも
しれないな……」

「んー？ 何か言つたー？」

「あ、な、何でもないですっ！」

「そう。じゃ、行くわよー」

「はいっ！」

数時間が過ぎた。

「着いたわ、ここよ」

「ここが西の森……。これで、私は戻れるの？」

「わからないわ。けれど、やるだけやつてみるんでしょう？」

「はいっ！」

二人のミーナは、西の森へと姿を消した。

一人のミーナは偶然出逢い、そしてそれを必然に変える（後書き）

作者：にやー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8175k/>

【小説投稿企画】不思議の国のお祭り事情

2011年10月30日14時58分発行